

温泉地に関する参考資料

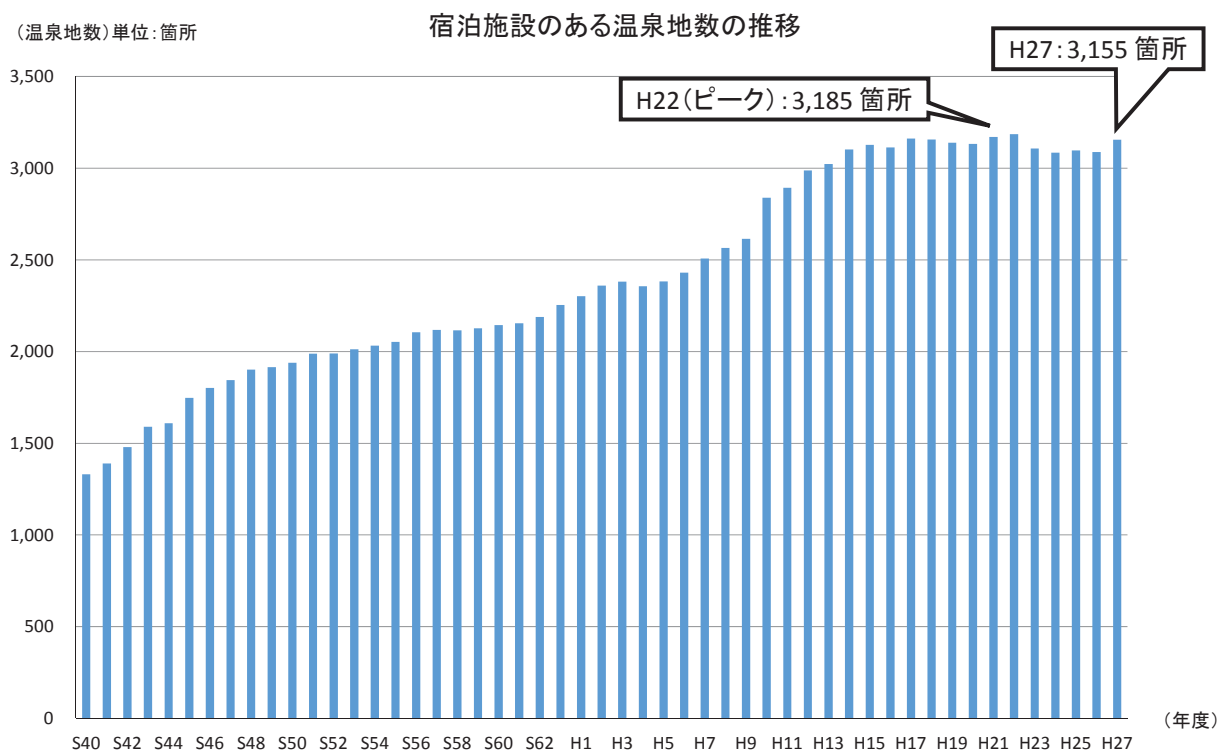
温泉地に関する参考資料 目次

1	温泉利用状況の推移	1
(1)	温泉地数の推移	1
(2)	源泉数の経年変化	2
(3)	温泉湧出量の経年変化	2
(4)	温泉利用の宿泊施設数及び公衆浴場数の経年変化	3
(5)	温泉利用施設における宿泊者数の推移	3
(6)	入湯税の推移	4
(7)	温泉利用状況経年変化表	5
2	旅行者動向及び旅行形態の変化	6
(1)	旅行形態の推移	6
(2)	行ってみたい旅行タイプ	7
(3)	訪日外国人数の推移	8
(4)	訪日外国人が次回日本でしたいこと	8
3	国民保養温泉地	9
(1)	国民保養温泉地指定制度について	9
(2)	国民保養温泉地の指定数と宿泊利用者数の推移	10
(3)	国民保養温泉地一覧	11
4	先進事例調査結果	12
(1)	かみのやま温泉におけるクアオルト事業に関する取組	13~20
(2)	城崎温泉におけるまちづくりに関する取組	21~26
(3)	土湯温泉における温泉エネルギーを利用した取組	27~30
(4)	ニセコ温泉におけるアクティビティを活かした取組	31~34
(5)	玉造温泉における温泉の効能を活かした取組	35~50
(6)	阿寒湖温泉における地域経済に関する取組	51~53
5	温泉療養等における調査・研究の事例（概要）	54~59

1 温泉利用状況の推移

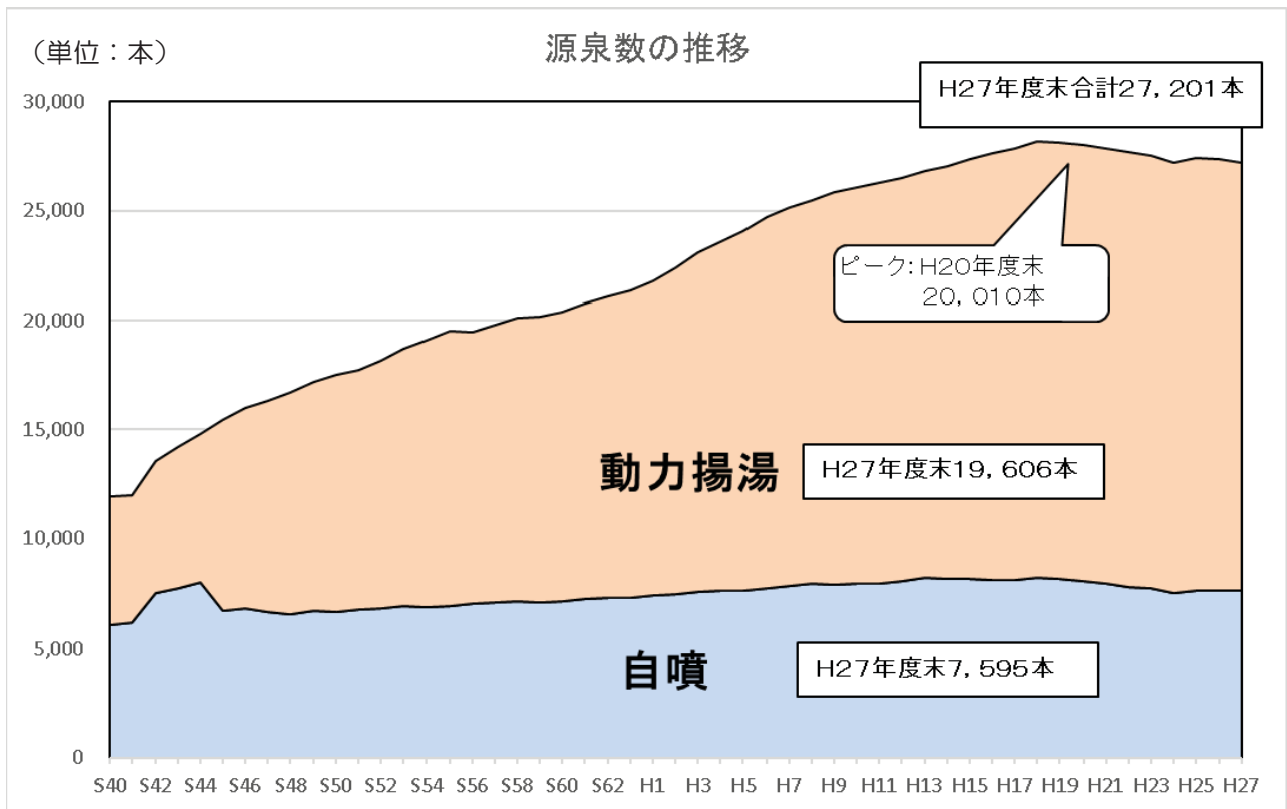
- (1) 温泉地数の推移
- (2) 源泉数の経年変化
- (3) 温泉湧出量の経年変化
- (4) 温泉利用の宿泊施設数及び公衆浴場数の経年変化
- (5) 温泉利用施設における宿泊者数の推移
- (6) 入湯税の推移
- (7) 温泉利用状況経年変化表

1 - (1) 温泉地数の推移

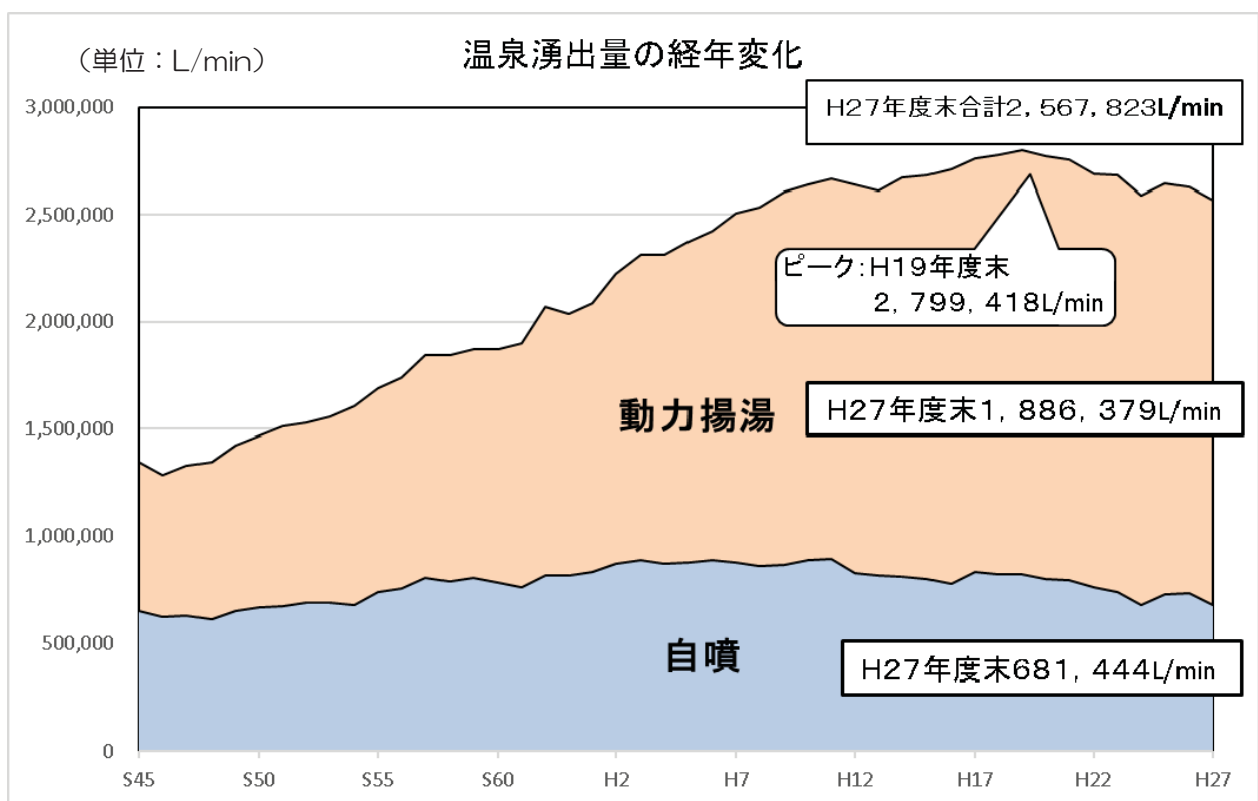


出典：環境省「温泉利用状況」

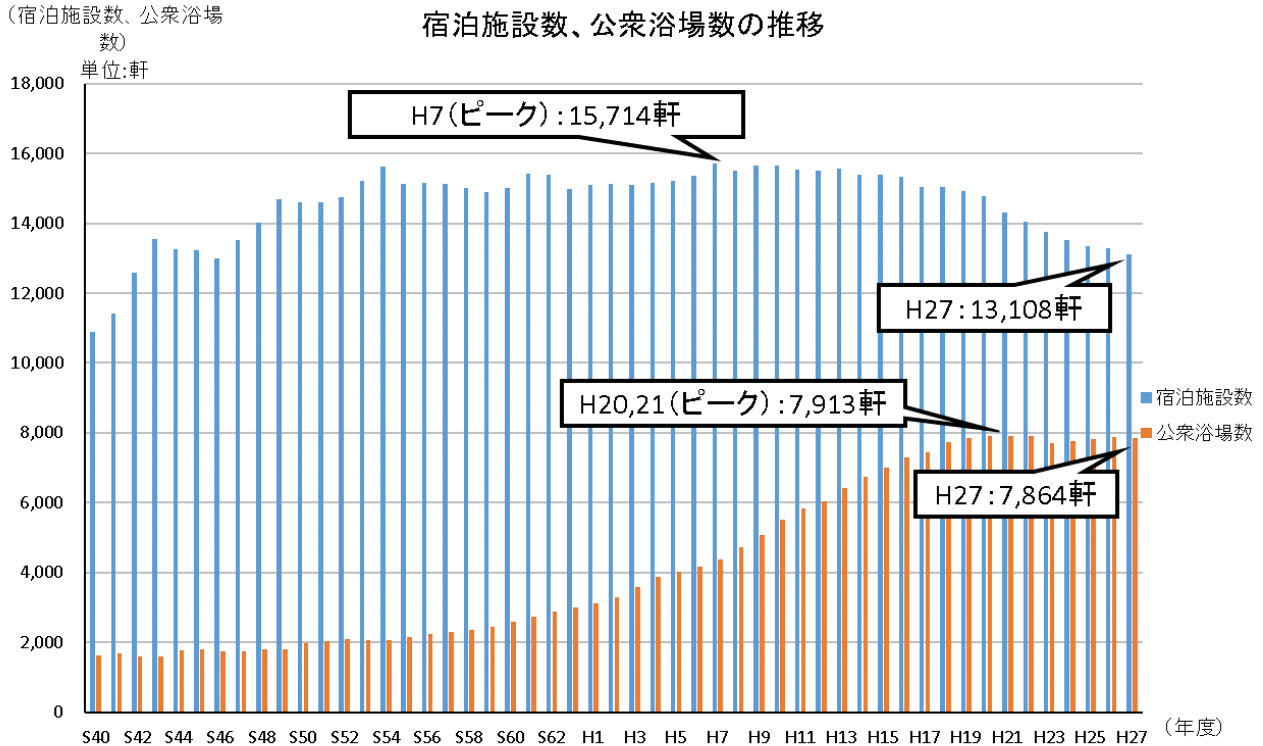
1 - (2) 源泉数の経年変化



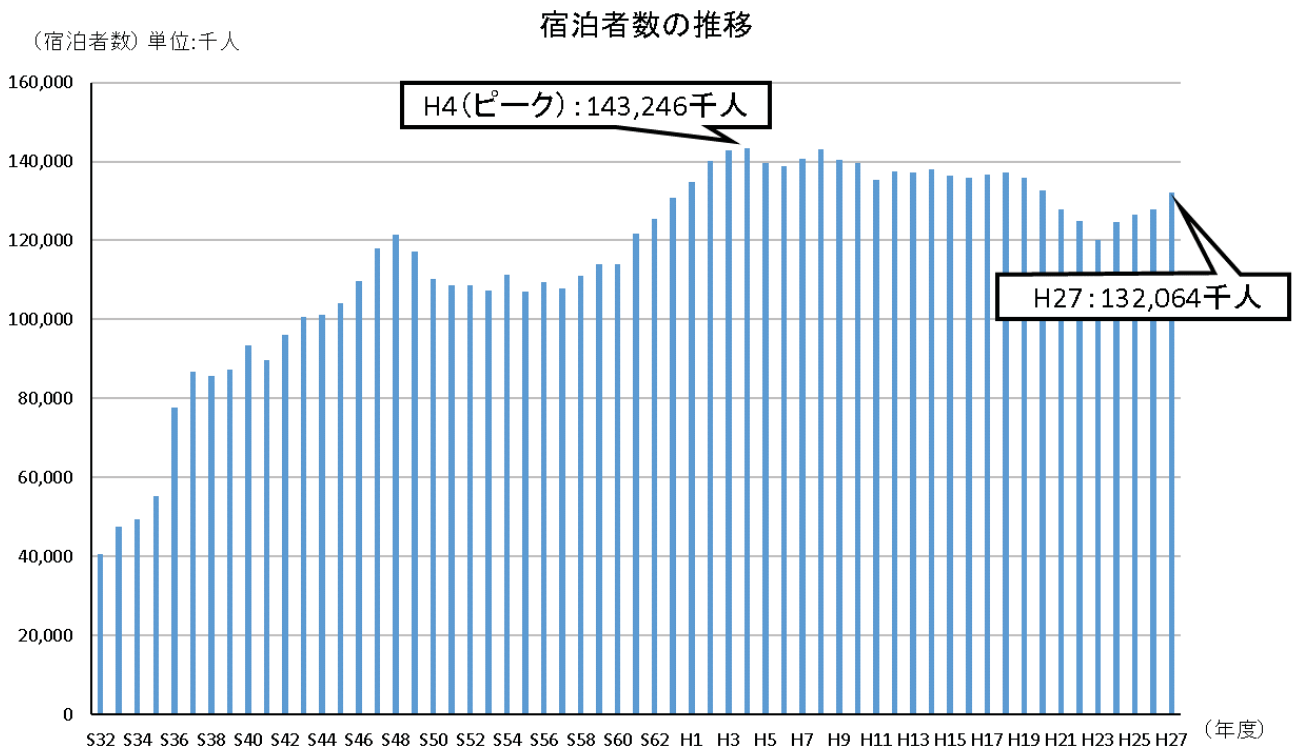
1 - (3) 温泉湧出量の経年変化



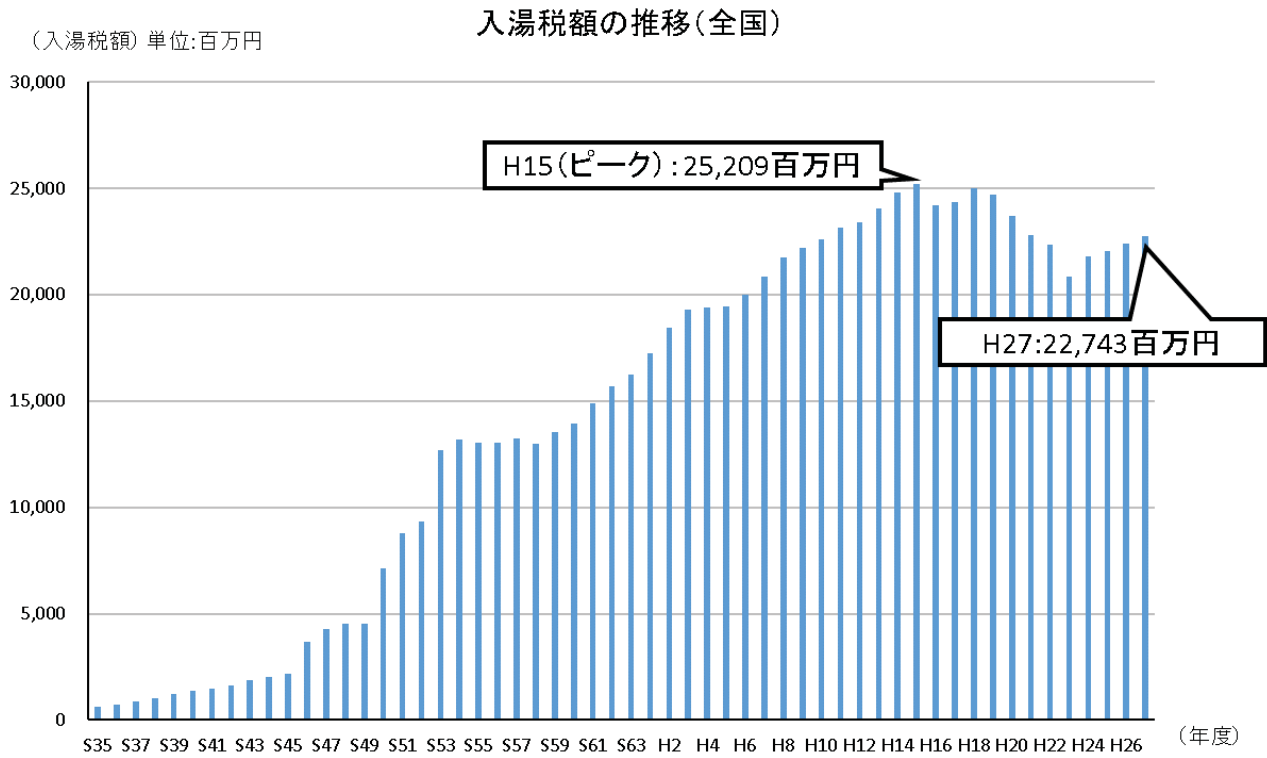
1 - (4) 温泉利用の宿泊施設数及び公衆浴場数の経年変化



1 - (5) 温泉利用施設における宿泊者数の推移



1-(6) 入湯税(全国)の推移

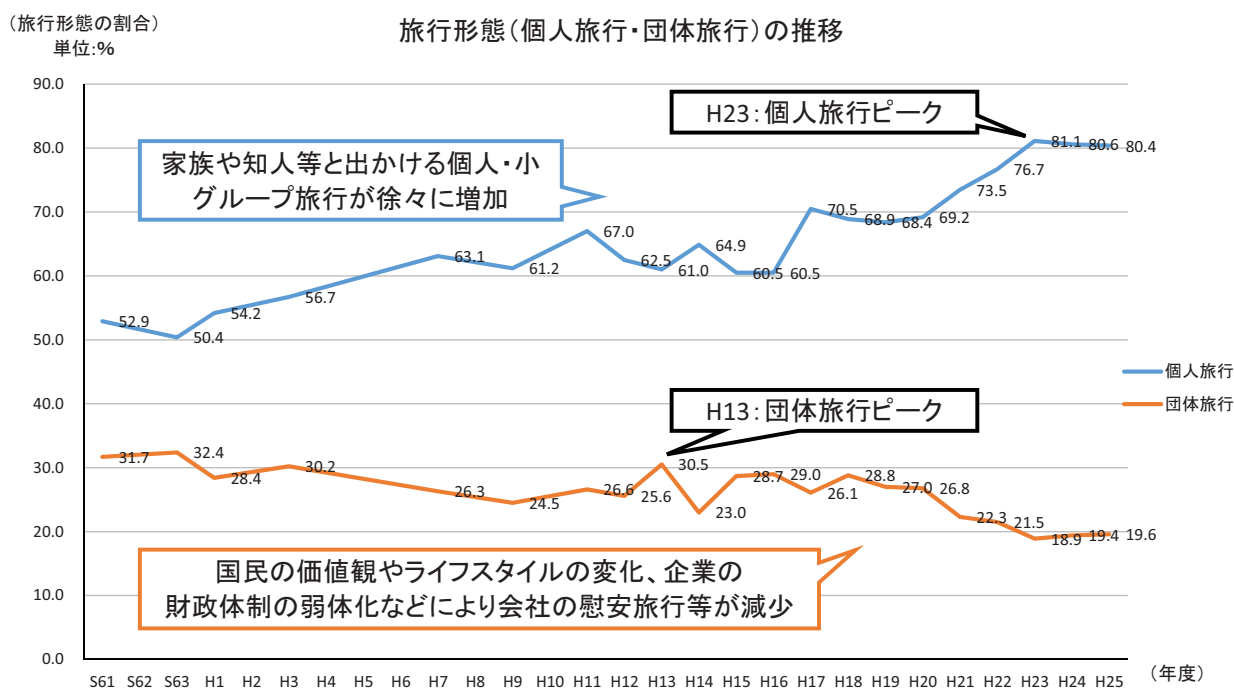


出典：総務省「地方税の税目別収入額及びその割合の推移」

2 旅行者動向及び旅行形態の変化

- (1) 旅行形態の推移
- (2) 行ってみたい旅行タイプ
- (3) 訪日外国人数の推移
- (4) 訪日外国人が次回日本でしたいこと

2- (1) 旅行形態の推移



出典：日本観光協会出版「観光の実態と志向」第1号～第33号
国土交通省「近年の観光行動の変化と交通の役割」

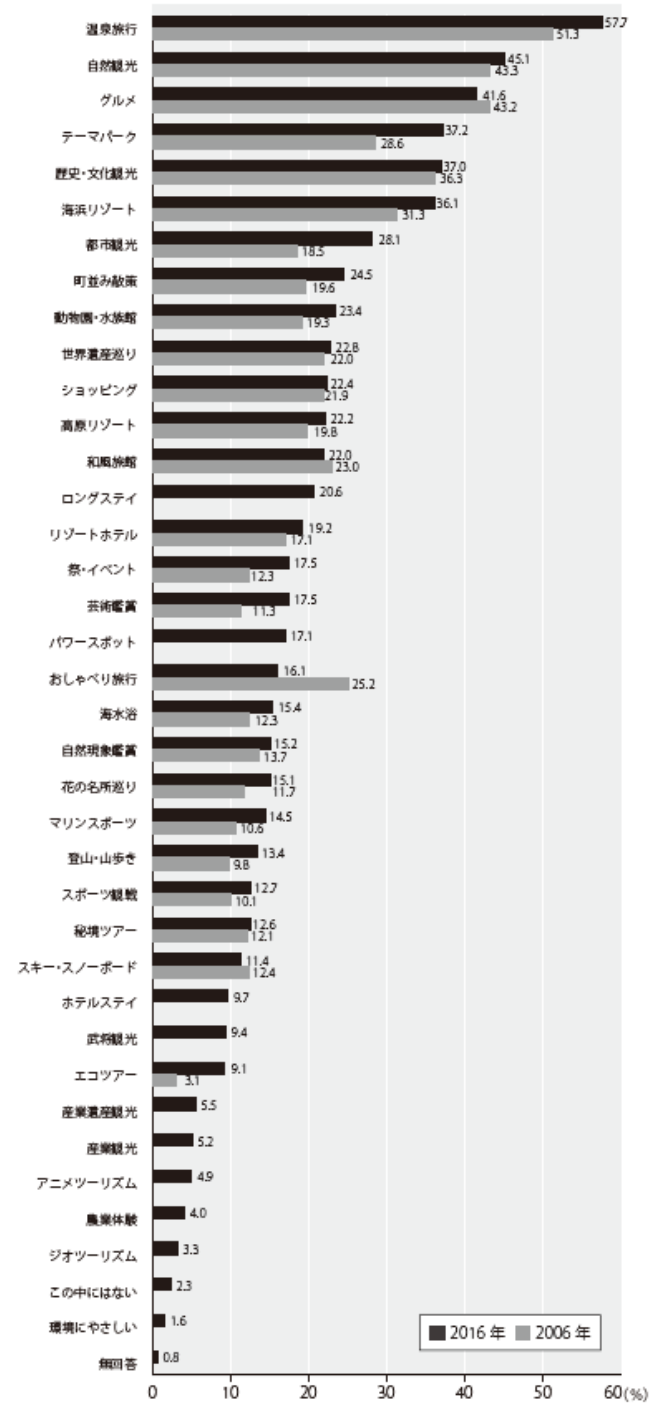
2- (2) 行ってみたい旅行タイプ

表I-4-2 行ってみたい旅行タイプ 選択肢一覧

	旅行タイプ名	内容
1	自然観光	自然や景勝地を見てまわる観光旅行
2	歴史・文化観光	歴史や文化的な名所を見てまわる観光旅行
3	海浜リゾート	海辺でゆったり過ごす旅行
4	高原リゾート	高原でゆったり過ごす旅行
5	都市観光	街や都市で楽しむ旅行
6	温泉旅行	温泉を楽しむ旅行
7	祭・イベント	祭やイベントを楽しむ旅行
8	テーマパーク	テーマパークや遊園地で楽しむ旅行
9	動物園・水族館	動物園や水族館で楽しむ旅行
10	グルメ	おいしいものを食べる旅行
11	スキー・スノーボード	スキーを楽しむ旅行
12	マリンスポーツ	マリンスポーツを楽しむ旅行
13	登山・山歩き	登山や山歩きを楽しむ旅行
14	海水浴	海水浴を楽しむ旅行
15	ショッピング	ショッピングを楽しむ旅行
16	芸術鑑賞	演劇、音楽、展覧会等を楽しむ旅行
17	スポーツ観戦	スポーツ観戦を楽しむ旅行
18	花の名所巡り	桜やハーブなどの花の名所を訪ねる旅行
19	自然現象観賞	珍しい自然現象を見に行く旅行
20	秘境ツアー	秘境を訪ねる旅行
21	町並み散策	美しい町並みを楽しむ旅行
22	リゾートホテル	リゾートホテルに泊まる旅行
23	和風旅館	落ち着いた和風旅館に泊まる旅行
24	おしゃべり旅行	仲間や家族と楽しく過ごす旅行 (みるもの、遊ぶものにはこだわらない)
25	世界遺産巡り	世界遺産を巡る旅行
26	ロングステイ	ロングステイを楽しむ旅行
27	パワースポット	神秘的な力・エネルギーの宿る場所を訪れる旅行
28	ホテルステイ	ホテルの旅館内での滞在そのものを主目的とした旅行
29	環境にやさしい旅行	旅行中に排出したCO ₂ を減らすための料金負担など、環境に配慮した旅行
30	エコツアー	自然を楽しみ、自然や環境を学ぶ旅行
31	農業体験	農産漁村などの環境やふるさと体験を楽しむ旅行
32	産業観光	工場見学やものづくり現場の見学・体験を楽しむ旅行
33	産業遺産観光	鉱山や紡績場などかつて栄えた産業跡訪れる旅行
34	武将観光	戦国武将にまつわる名所・旧跡を訪れる旅行
35	ジオツーリズム	地質や地形など地球科学的な現象に対する理解を深める旅行
36	アニメツーリズム	アニメマンガに関連する場所や施設、イベントを楽しむ旅行
37	この中にはない/旅行には行かない	

資料：(公財)日本交通公社「JTBF旅行需要調査」

図I-4-1 行ってみたい旅行タイプ(複数回答)



資料：(公財)日本交通公社「JTBF旅行需要調査」

調査名：JTBF旅行意識調査

調査対象：全国18～79歳の男女(調査会社のパネルより抽出)

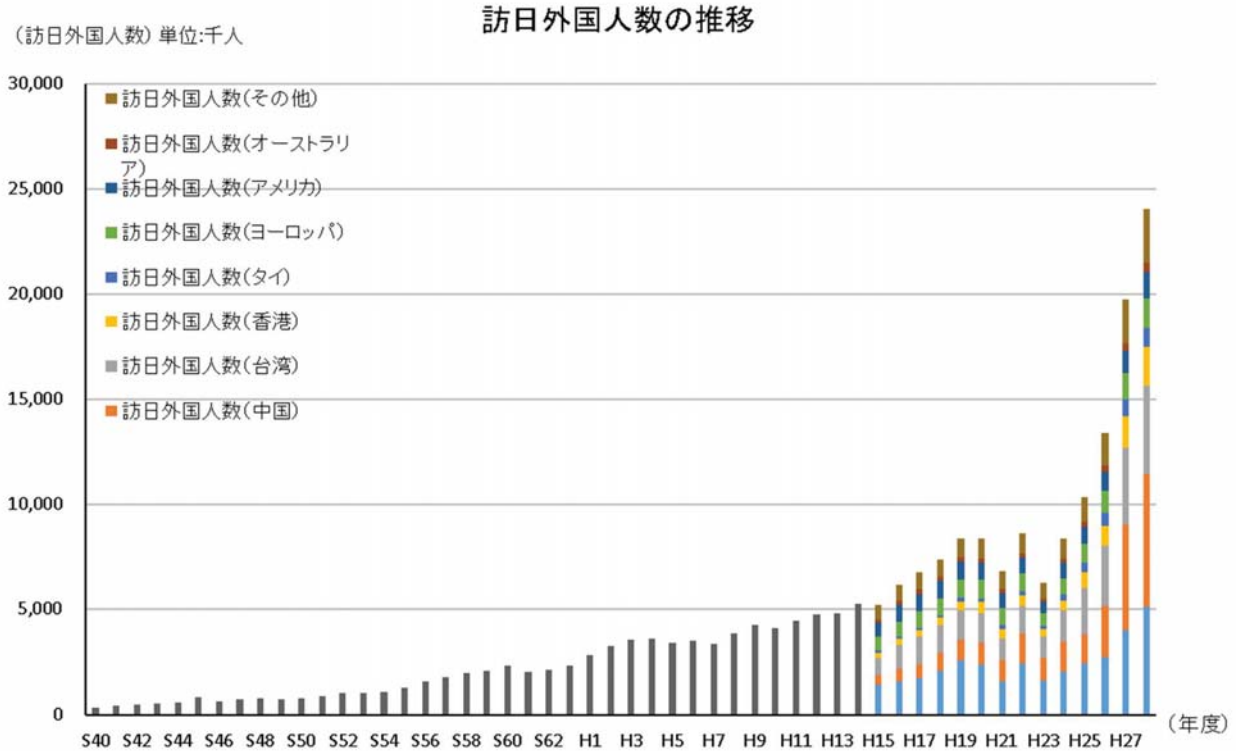
調査方法：郵送自記式調査

調査項目：旅行に関する意識を調査

調査時期：2016年6月実施

出典：公益財団法人日本交通公社
「旅行年報 2016」

2-(3) 訪日外国人数の推移



出典：JNTO「統計データ（訪日外国人）」

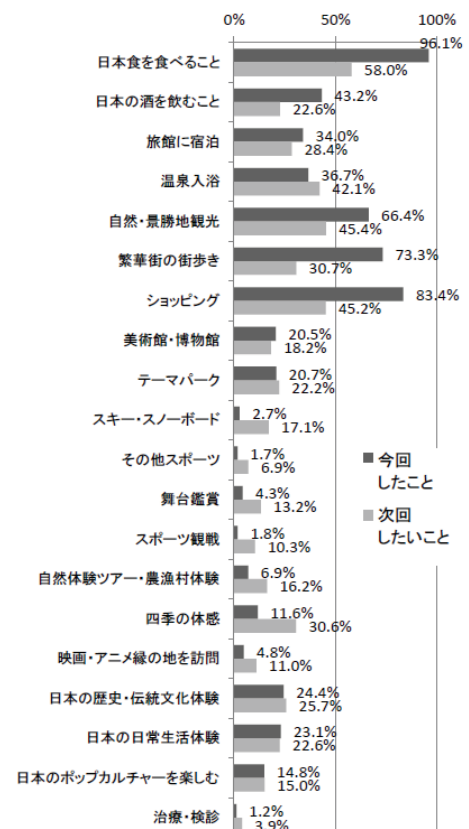
2-(4) 訪日外国人が次回日本でしたいこと

訪日外国人が次回日本でしたいこと

- | | | |
|----|-----------|-------|
| 1位 | 日本食を食べること | 58.0% |
| 2位 | 自然・景勝地観光 | 45.4% |
| 3位 | ショッピング | 45.2% |
| 4位 | 温泉入浴 | 42.1% |
| 5位 | 繁華街の街歩き | 30.7% |

出典：観光庁「訪日外国人の消費動向調査 平成28年 年次報告書」

図表 6-3 今回したことと次回したいこと
(全国籍・地域、複数回答)



3. 国民保養温泉地

- (1) 国民保養温泉地指定制度について
- (2) 国民保養温泉地の指定数と宿泊利用者数の推移
- (3) 国民保養温泉地一覧（都道府県別）

3-（1）国民保養温泉地指定制度について

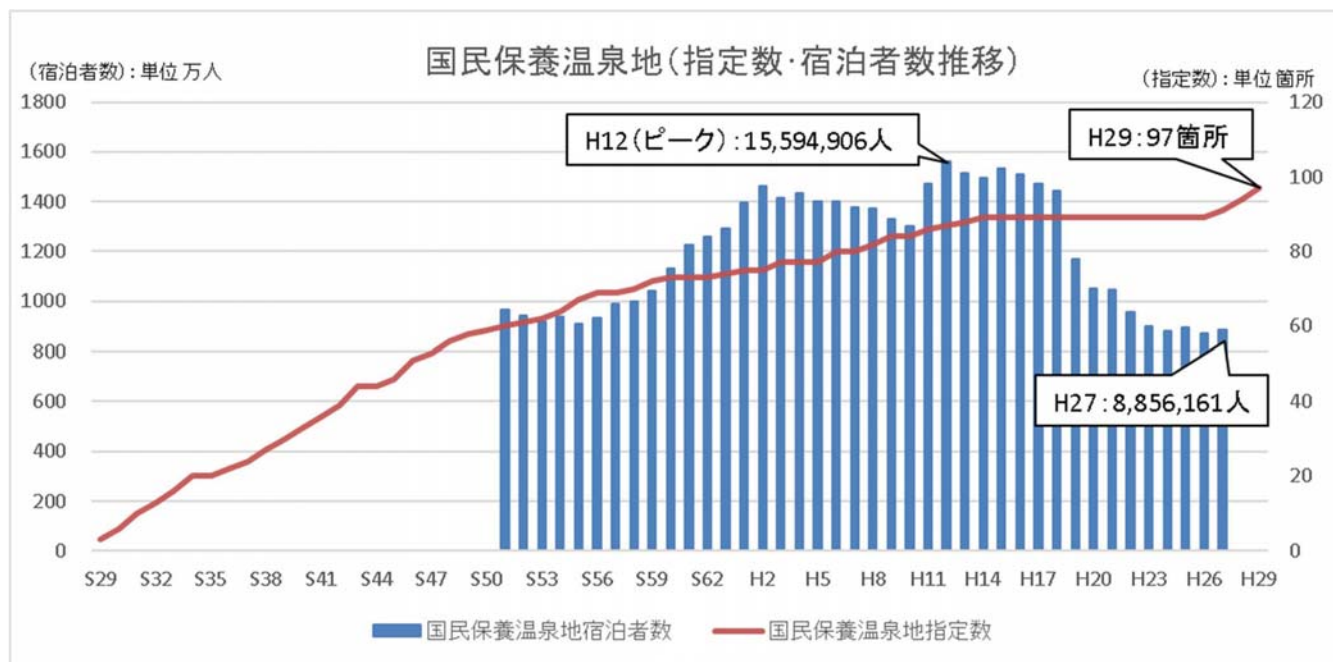
概要

- ・ **温泉法第29条（昭和23年法律第125号）に基づき、国民の保健休養に重要な役割を果たす温泉地として、環境大臣が指定する地域。**
- ・ 全97箇所中、半数近くが国立・国定公園内に存在。
- ・ 多様な泉質を誇り、湯治・温泉療養といった長期滞在を目的とした温泉地も含まれる。
- ・ ひなびた温泉地が多く、温泉情緒を満喫できる。
- ・ 環境省が観光協会、市町村、都道府県等と協議し、温泉や地域資源を活かした実施計画を策定。
- ・ 昭和29年「酸ヶ湯（すかゆ）（青森）」、「四万（しま）（群馬）」、「日光湯元（栃木）」を指定以降、平成29年5月15日現在で97箇所を指定。

選定標準

- 第1：温泉に効能があり、湯量が豊富であること。
- 第2：自然の豊かさ、温泉街の歴史、優れた気候、祭りといった文化があること。
- 第3：医師又は医療施設との連携状況・入浴方法等の指導ができる人材の常駐性。
- 第4：温泉資源の保護を図り、衛生面等の対策を実施すること。

3-（2）国民保養温泉地の指定数と宿泊利用者数の推移



出典：環境省「温泉利用状況」

名	称	道府県	所在地	指定年月日	名	称	道府県	所在地	指定年月日
カルス温泉	温泉	北海道	登別市	S 32. 9. 27	増富温泉郷	梨山	北杜市	S 40. 8. 5	
北湯沢温泉郷	温泉郷	"	伊達市	"	田沢・沓掛温泉	"	上田市	S 31. 6. 15	
二七温泉	温泉	"	磯谷郡蘭越町、虻田郡二七町	S 33. 11. 1	小谷温泉	"	小泉郡青木村	S 45. 3. 24	
恵山温泉郷	温泉郷	"	函館市	S 40. 8. 5	白骨温泉	"	北安曇郡小谷村	S 46. 3. 23	
十勝岳温泉郷	温泉郷	"	空知郡上富良野町	S 42. 10. 19	有明・穂高温泉	"	松本市	S 49. 3. 30	
然別峡温泉	温泉	"	芦根郡鹿追町	S 46. 3. 23	美ヶ原温泉	"	安曇野市	S 55. 3. 27	
雌阿寒温泉	温泉	"	芦別市	S 48. 3. 30	香野温泉	"	松本市	S 58. 3. 28	
湯阿寒温泉	温泉	"	足寄郡足寄町	"	平湯温泉	"	下高井郡山ノ内町	H 3. 4. 16	
湯ノ岱温泉	温泉	"	桧山郡上ノ国町	S 49. 3. 30	奥飛騨温泉郷	"	高山市	S 39. 6. 8	
盃温泉	温泉	"	古宇郡泊村	S 50. 7. 5	白川郷温泉	"	大野郡白川村	S 43. 11. 19	
貝取洞温泉	温泉	"	久遠郡せたな町	S 51. 3. 27	小坂温泉郷	"	下呂市	S 55. 3. 27	
幕別温泉	温泉	"	中川郡幕別町	S 52. 5. 31	畑毛・奈古谷温泉	静岡	伊豆の国市、田方郡函南町	S 58. 3. 28	
ながぬま温泉	温泉	"	夕張郡長沼町	S 63. 7. 1	梅ヶ島温泉郷	"	静岡市	S 27. 3. 10	
豊富温泉	温泉	"	天塩郡豊町	H 4. 1. 13	湯ノ口温泉郷	三重	静岡市	H 29. 5. 15	
洞爺温泉	だまり温泉	"	虻田郡洞爺湖町	H 9. 5. 1	久美の浜温泉郷	京都	京丹後市	H 9. 5. 1	
酸ヶ湯温泉	温泉	青森	青森市	S 29. 10. 11	るり浜温泉郷	"	南丹市	H 12. 5. 11	
栗研温泉	温泉	"	むつ市	S 46. 3. 23	浜坂温泉郷	兵庫	美野郡新温泉町	H 3. 4. 16	
八幡平温泉	温泉郷	岩手	八幡平市	S 34. 9. 3	十津川温泉郷	奈良	吉野郡十津川村	S 60. 3. 19	
大館ぐるみ温泉郷	温泉郷	秋田	仙北市	"	熊野本宮温泉郷	和歌山	田辺市	S 32. 9. 29	
須川・真湯温泉	温泉	"	大館市	H 29. 5. 15	龍神温泉郷	"	"	H 8. 5. 2	
夏油温泉	温泉	"	一関市	S 33. 11. 1	鹿野・吉岡温泉	鳥取	鳥取市	S 41. 7. 22	
金田温泉	温泉	"	北上市	S 40. 8. 5	関釜温泉	"	倉吉市	S 45. 3. 24	
鳴子温泉郷	温泉郷	城	二戸市	H 6. 4. 28	岩井温泉	"	岩美郡岩美町	S 48. 3. 30	
田沢湖高原温泉郷	温泉郷	宮城	大崎市	H 28. 5. 20	三瓶温泉	島	大田市	S 34. 5. 5	
秋ノ宮温泉	温泉	秋	仙北市	S 42. 10. 19	鷹の湯温泉	"	安来市	S 37. 3. 10	
蔵王温泉	温泉	"	湯沢市	S 53. 3. 31	湯原温泉	岡	真庭市	S 31. 6. 15	
銀山温泉	温泉	"	山形市	S 33. 11. 1	奥津温泉	"	苫田郡鏡野町	S 41. 7. 22	
碓氷温泉	温泉	"	尾花沢市	S 43. 11. 19	湯来・湯の山温泉	"	美作市	H 29. 5. 15	
肘折温泉	温泉	"	村山市	S 60. 3. 19	湯野温泉	広	広島市	S 30. 7. 4	
湯田川温泉	温泉	"	最上郡大蔵村	H 元. 10. 16	矢野温泉	山	府中市	S 47. 7. 29	
岳温泉	温泉	福	鶴岡市	H 13. 11. 13	俵山温泉	"	長門市	S 30. 7. 4	
新甲子温泉	温泉	"	二本松市	S 30. 8. 24	三丘温泉郷	"	周南市	S 36. 4. 1	
土岐温泉	温泉	"	西白河郡西郷村	S 38. 4. 19	塩江温泉郷	香	高松市	H 14. 3. 29	
泉	湯本・天来温泉	"	福島市	H 11. 4. 20	湯ノ浦温泉	愛媛	今治市	H 6. 4. 28	
奥日光温泉	温泉	栃	岩瀬郡天栄村	H 28. 5. 20	筑後川温泉	福	うきは市	S 43. 11. 19	
板室温泉	温泉	"	日光市	S 29. 10. 11	吉井温泉	"	"	"	
四万温泉	温泉	群	那須塩原市	S 46. 3. 23	古湯・熊の川温泉	賀	佐賀市	S 41. 7. 22	
鹿沢温泉	温泉	"	吾妻郡中之条町	S 29. 10. 11	雲仙・小浜温泉	崎	雲仙市	S 31. 6. 15	
上牧温泉郷	温泉郷	"	利根郡みなかみ町	S 43. 11. 19	老岐湯本温泉	"	市	S 37. 3. 10	
片品温泉	温泉	"	"	S 54. 3. 27	天草下田温泉	熊	市	S 46. 3. 23	
湯宿・川古温泉	温泉	"	"	S 58. 3. 28	南小国温泉郷	"	市	S 38. 4. 19	
芦之湯温泉	温泉	神	"	H 11. 4. 20	湯の鶴温泉	"	阿蘇郡南小国町	S 39. 6. 8	
弥彦温泉	温泉	新	足柄下郡箱根町	H 27. 5. 1	湯布院温泉	大	水俣市	S 55. 3. 27	
関ヶ原温泉	温泉	"	西蒲原郡弥彦村、新湯市	S 38. 4. 19	竹田温泉群 (長湯温泉、久住温泉、竹田・萩温泉)	"	田布市	S 34. 5. 5	
栃尾温泉	温泉	"	南魚沼市	S 39. 6. 8	住田温泉郷	"	竹田市	H 27. 5. 1	
五頭温泉郷	温泉郷	"	妙高市	S 47. 7. 29	鉄輪・明礬・柴石温泉	"	別府市	S 60. 3. 19	
白部温泉	温泉	"	魚沼市	S 54. 3. 27	霧島温泉	鹿	霧島市	S 34. 5. 5	
		"	阿賀野市	H 28. 5. 20	隼人・新川溪谷温泉郷	"	"	S 42. 10. 19	
		石	南巨摩郡身延町	S 36. 4. 1					
		山		S 31. 6. 15					
					合計	97	か所		

4 先進事例調査結果

■調査の目的

温泉資源、まちなみ、景観、歴史文化、地域資源などを活かし温泉地の総合的な魅力向上を図るために必要となる事項を整理するうえで、今後の温泉地の活性化策の参考とするための事例調査を実施。

■調査結果概要

調査対象は、各地で実施されている温泉の効能及び周囲の多様な自然環境でのウォーキング、地域資源などを活かし活性化を図っている温泉地（6事例）。

No	観点	温泉地名 (所在地)	背景・課題	主な取組内容	概算 事業費	主な効果	継続にあたっての課題・成功ポイント (●：課題、○：成功ポイント)	取組実施にあたって 国や自治体に期待される役割
(1)	健康	かみのやま温泉 (山形県上山市)	<ul style="list-style-type: none"> 友好都市として交流しているドイツのクアオルトについて学ぶ機会があった 国民健康保険医療給付費や高齢化率が県内でも高水準 東日本大震災の影響もあり、年間宿泊客数が減少傾向 	<ul style="list-style-type: none"> 主導：自治体、ターゲット：(健康増進)市民、(交流人口)中高年層の女性 「気候性地形療法」を取り入れたウォーキング参加者に共同浴場無料券や優待券等を配布しその後の温泉入浴を促進 クアオルト推進室を設置し、保健師やウォーキングガイド業務を行う健康運動指導士等から構成 	(初期投資) 2,000万円 (クアオルト事業) 2,000万円 (温泉健康施設関連事業) 1,600万円	<ul style="list-style-type: none"> クアオルト体験プログラムの受け入れが可能となった 関心を持つ旅館が増加 来訪者との交流による市民のソーシャル・キャピタルの醸成 	<ul style="list-style-type: none"> ● 市民及び地域事業者等における正しい理解と認知度の不足 ○ 短期的な成果を積み重ね、浸透度の一層の向上を図り、本事業に関わる人を増やしていくことで、まずは住む人が誇りを持てる事業に時間をかけて育てていくこと 	<ul style="list-style-type: none"> 市民及び来訪者の的確なニーズ把握 市民、地域・団体、事業者が事業に関わり活動しやすい環境づくりの支援 財源確保の支援
(2)	まちづくり	城崎温泉 (兵庫県豊岡市)	<ul style="list-style-type: none"> 労働力不足など(後継者不足による旅館等の廃業) 閑散期の集客不足 温泉地としての限界(豊岡市残帯での周遊) 	<ul style="list-style-type: none"> 主導：官民、ターゲット：外国人観光客 過疎債等を有効に活用しながら、過疎地域のやる気と元気をつくりだす取組を開始(H22.4~) 地域住民からの提案事業を中心に、取組計画を策定 	(平成23~平成27) 43,500万円 (平成26~平成28) 12,300万円	<ul style="list-style-type: none"> 観光客入込数(宿泊)の増加(約1.7割増、約178,000人増) 6次産業として多産業に効果 観光消費額の増加 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 官民及び市民の対話と共感、そして連携 ○ 情報の共有 	<ul style="list-style-type: none"> 活動費の支援 先進事例等の紹介
(3)	熱利用	土湯温泉 (福島県福島市)	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災並びに原発事故により、旅館が廃業し温泉地としての収容規模が縮小 県外からの団体観光客が約1割~2割戻ってきていない 高齢化率の上昇、空き家の増加に伴う持続可能な生活圏の維持が課題 	<ul style="list-style-type: none"> 主導：民間、ターゲット：不特定 蒸気泉を利用したバイナリー発電や小水力発電を実施 再生可能エネルギー事業を活かしたエコツーリズム事業や、温泉熱を活用したエビ養殖事業 	(再生可能エネルギー事業) 100,000万円	<ul style="list-style-type: none"> 再生可能エネルギー関連だけで年間2000人の増員。その6割が宿泊に繋がっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 再生可能エネルギー事業で得た売電収益を、持続可能な生活圏維持のための事業への展開 ○ 正確な維持管理ができる人員数の確保と人材育成 ○ 地域との合意・創意に基づいたまちづくり 	<ul style="list-style-type: none"> 画一的な支援だけではなく、地域の実情にあった細やかな支援と指導 許認可等についての規制緩和の考慮
(4)	アクティビティ	ニセコ温泉郷 (北海道ニセコ町)	<ul style="list-style-type: none"> 戦前、戦後と温泉地として栄えていたが、スキー場建設が進み、ホテル等のリゾートエリア形成により温泉場は衰退 スキー観光の進展により夏季と冬季のギャップが課題となり、カヌーなどの夏季のアクティビティ開発が進む 近年のインバウンド急増で冬季の入込が集中。宿泊者数の平準化が課題 	<ul style="list-style-type: none"> 主導：官民(町は主に支援)、ターゲット：外国人観光客、リピーター アクティビティや温泉施設アクセスのため地域の周遊性を高めるとともに、利便性を高めることで通年での平準化を図る アクティビティ事業を行っている民間事業者への支援 アクティビティ等目的の外国人観光客への配慮 	(周遊バス事業) 800万円/年	<ul style="list-style-type: none"> 観光入れ込み数の増加 スキー目的の外国人客の増加による温泉宿泊利用者数の増加 地域周遊による各地での経済的波及効果 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先を見据えた事業の受け入れを行うとともに、制度等の柔軟な見直しを行う。 ○ 町外の方々も含め新規事業の提案がしやすい地域作りを行うこと 	<ul style="list-style-type: none"> 各地に点在している温泉をはじめとしたニセコ地域の観光資源を結び、周遊を可能とする交通体系確保の支援 「誘客→利用者の満足度確保→リピーター」とするための設備更新など施設環境整備等に関する支援
(5)	効能(泉質)	玉造温泉 (島根県松江市)	<ul style="list-style-type: none"> 昭和からバブル期に向けて大型旅館化などの開発が行われたが、旅行形態の変化(団体旅行→個人旅行)についていけずバブル期以降は温泉街も旅館も衰退 	<ul style="list-style-type: none"> 主導：民間、ターゲット：20~30代女性 テーマを「美肌・姫神の湯玉造温泉」と設定し、テーマに沿った資源活用を計画 魅力化された温泉を効果的に宣伝するための、全国的にも先を行くPR方法を計画 既存組織の改革や、まちあるき観光事業、イベントの見直し等を実施 	(初期投資) 10,000万円 (平成21~平成23) 22,000万円	<ul style="list-style-type: none"> 観光客入込数(宿泊)の増加(約0.3割増、約20,000人増) 温泉街における店舗数の増加 新規雇用創出 地域DMOモデルとして評価をうける 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「稼ぐ」ということを考えて事業を展開すること 	<ul style="list-style-type: none"> 「ふるさと雇用再生特別基金事業」の効果検証 成果のあった事業についての情報発信(先進事例等の紹介)
(6)	地域経済	阿寒湖温泉 (北海道釧路市)	<ul style="list-style-type: none"> 観光客入込数の減少 入湯税収額の減少 	<ul style="list-style-type: none"> 主導：自治体、ターゲット：不特定 観光振興をさらに推進する事業の財源確保のため入湯税率の引き上げを実施 	-	<ul style="list-style-type: none"> 増収分を補助金として、国際観光地環境整備事業やおもてなし事業に活用 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 税収見込みに見合った使途事業の精査 ● 入湯税以外の事業財源の確保 	<ul style="list-style-type: none"> 税の投入に関する使途事業の精査

1. 各事例の調査結果

(1) かみのやま温泉におけるクアオルト事業に関する取組（山形県上山市）

■「かみのやま温泉」について

- かみのやま温泉は、長祿2年（1458年）、肥前の国（現在の佐賀県）の僧、月秀上人が旅の途中に上山を訪れた際に、脛に傷を負った一羽の鶴が沼地に湧く湯でけがを治して飛び立ったのを見たのがはじまりと言われ、現在でも「鶴脛町」という町名が残っている。
- かみのやま温泉は、湯町、新湯、十日町、河崎、高松、葉山に温泉があり、各地区は温泉が湧き出した時期も異なり、それぞれに特色がある。総称して上山温泉郷と呼ばれていたが、平成4年(1992年)の山形新幹線つばさ開通に伴い、駅名を「上山駅」から親しみやすい「かみのやま温泉駅」に変更した際に、温泉名も「かみのやま温泉」とひらがな表記にし、温泉全体を称して、かみのやま温泉郷としている。
- 万人向けの泉質で、温まりの湯・美肌の湯として親しまれている。



■温泉地を取り巻く社会状況

- 山形県内屈指の温泉地として、年間40万人の宿泊者を迎えていたが、東日本大震災の影響が大きく、震災前の宿泊者数に回復できていない。またインバウンドについても、東北地方全体としても取り込みができていない状況である。

■取組の概要

(1) 取組を計画するに至った背景・経緯

- ドイツ・ドナウエッシンゲン市と約20年にわたり友好都市として交流しており、ドイツのクアオルト（健康保養地）について学ぶ機会があった。また、市民一人あたり国民健康保険医療給付費や高齢化率が県内でも高水準にあり、さらには年間宿泊客数も減少傾向にあった。そうした中で平成20年度から、温泉や自然環境、食などの地域資源を活かして、市民の健康増進と交流人口の拡大による地域活性化を目的に、“心と体がうるおう”まちづくりを展開している。

平成20年：地方の元気再生事業に採択され、「気候性地形療法ウォーキングコース（西山・葉山・蔵王高原坊平）」ミュンヘン大学認定、上山型温泉クアオルト事業を開始。

平成21年：「気候性地形療法ウォーキングコース（三吉山・虚空蔵山）」ミュンヘン大学認定、「早朝ウォーキング」開始（地域住民による自主的取組）、「気候性地形療法ウォーキングガイド（専任ガイド）」育成講座開始、「気候性地形療法を基本としたクアオルト健康ウォーキング」スタート。

平成22年：「土日ウォーキング」スタート。

平成23年：「毎日ウォーキング」スタート。

平成26年：「専任ガイド」更新制度実施、研修科目に「健康づくり」分野を追加、「第3回健康寿命を伸ばそう！アワード」受賞。

平成 27 年：厚労省の採択により「宿泊型新保健指導試行事業（スマート・ライフ・ステイ）」実施、「第 1 回やまがた健康づくり大賞」受賞。

(2) 取組の狙い

- ・市民の健康増進については、全市民を対象に、医科学的根拠に基づくウォーキングを年間通して体験できる環境を整え、そこに温泉入浴等を組み合わせるなど、地域資源を活かした健康づくりの機会を提供するとともに、認知度向上を狙っている。
- ・交流人口の拡大については、主に国内における中高年の女性をターゲットに、運動（ウォーキング）・休養（温泉でリラックス）・栄養（地元食材を生かしたバランス食）における質の高いプログラムにより “健康への気付きの旅”を提供し、長期滞在を狙っている。

(3) 主な取組とその特徴

- ・「上山型温泉クアオルト構想」を策定し、「第 7 次上山市新興計画」にも柱に位置付け、市民の健康増進と交流人口の拡大を目的に、温泉をはじめ、今ある地域資源を存分に活かした、官民一体となったまちづくり施策である点が大きな特徴である。
- ・温泉に関する具体的な取組としては、ドイツでは心臓のリハビリや高血圧の治療として行われる、頑張らないで効果を上げる運動療法である「気候性地形療法」を取り入れたウォーキングをはじめ、参加者には共同浴場無料券・旅館入浴優待券等を配布しその後の温泉入浴を促す工夫を行っている。また今後は、温泉を活用して個人の体力レベルに応じた健康づくりができるよう、その拠点施設として温泉健康施設の整備を図り、健康増進から介護予防まで生涯を通じて切れ目のない総合的な健康づくりを展開している。
- ・平成 23 年から市役所内にクアオルト推進室を設置し、保健師を含む職員のほか、ウォーキングガイド業務を行う健康運動指導士等を構成している。

●クアオルト健康ウォーキング

- ・ドイツで行われている、頑張らずに楽しく歩くことで運動効果を高める「気候性地形療法」の手法（癒しを目的とした森林散策や森林セラピーとは異なる運動療法のひとつ。自分の体力にあった歩行スピードで、冷気と風、太陽光線などの気候要素を活用し、体表面を冷たく保ちながら、森や山の中の傾斜地を歩くことで効果的に持久力を強化するというもの）で、平成 21 年から取り組んでいる。

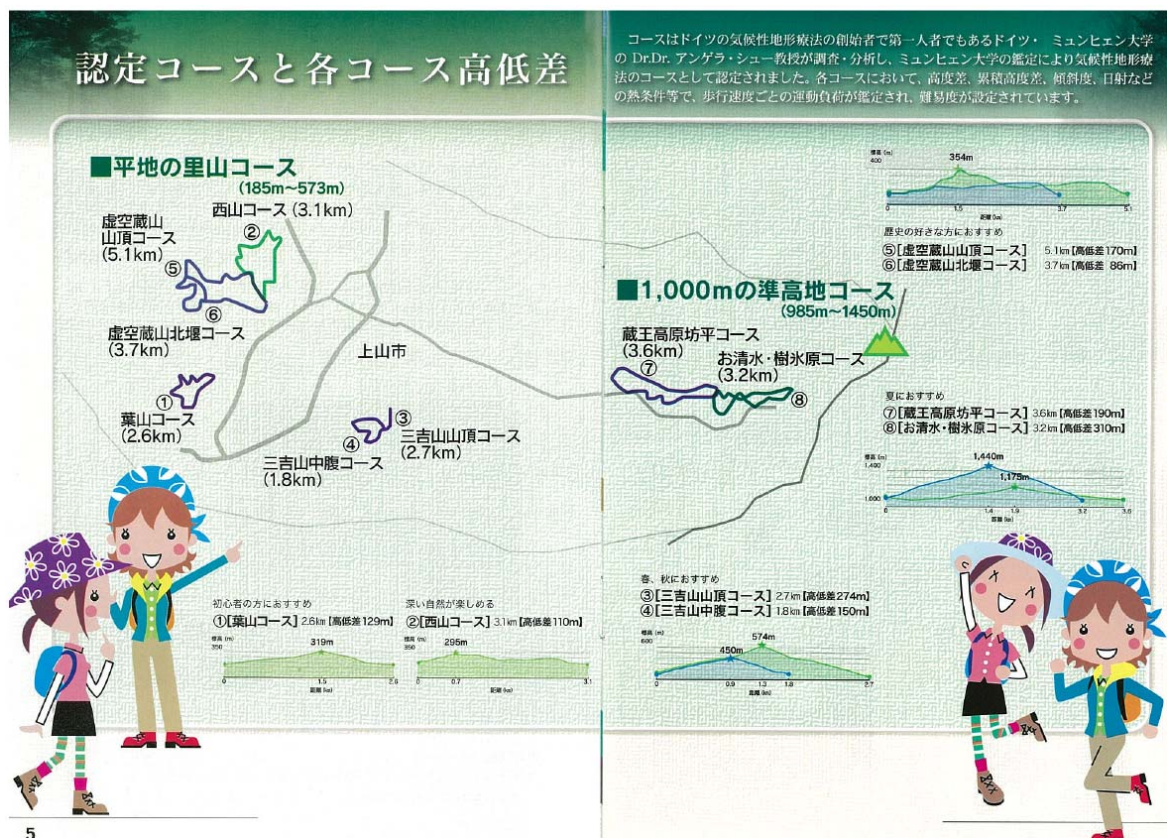
- ・クアオルト健康ウォーキングのコースは、

日本で唯一、ドイツのミュンヘン大学から専門コースとしての認定を受けている。

*毎日ウォーキング：毎日歩きたい地元リピーター等を対象としており、いつでも、だれでも、一人でも、申し込み不要で参加が可能。コースは日替わりで、2～3 時間程度のコースとなっている。



- *暮色ウォーキング：夕食前の時間に里山を散策するコース。宿泊者等を対象に、歩いた後の温泉や食事を含めた効果を狙っている。
- *プライベートウォーキング：好みのコースをプランニングして、専門のガイドとともに歩くプログラム。



●地域資源を活用した“楽しさ×おもてなし”の宿泊型保健指導プログラム

- ・平成 27 年度には、厚生労働省「宿泊型新保健指導試行事業（スマート・ライフ・ステイ）」の採択を受け、“保健指導×観光”を融合したプログラムを全国に先駆けて実施した。
- *寺子屋講座：市の観光資源のひとつである武家屋敷を活用し、穏やかな雰囲気の中で講座を実施している。生活習慣病を理解し、自分の健康状態を知り、生活習慣改善のヒントを得るというプログラム。
- *運動講和・実技：心拍をチェックしながら、有酸素運動を実施している。自分の体力を知り、できないことをマイナスにとらえず、今後の体力づくりの動機付けとするプログラム。
- *グループワーク・個別面談：仲間意識を高めるため、3～4人でグループを編成し、グループワークを行うプログラム。その後、担当スタッフと個別に行動目標と計画を立案し、自分で書き込んで決意表明をする。
- *セルフモニタリング：朝食前・就寝前に、体重・血圧・腹囲を自己測定する。記録の付け方を実習し、セルフモニタリングの習慣づけを行う。

*リラクゼーション（ストレス解消と眠りへの誘いーヨガ呼吸法）：さまざまなストレスをマネジメントできるよう、呼吸を意識しながら、心身の緊張を緩和し、その手法を学ぶプログラム。



*早朝ウォーキング：旅館の主人の案内で市民と一緒に体験するプログラム。展望台から望む市街地や蔵王連峰を見ながら、1日のエネルギーをチャージする。



*クアオルト健康ウォーキング：専任ガイドの案内による、医学的根拠に基づいたウォーキングプログラム。頑張らないで楽しく運動効果を高める。



*宿泊場所の地元温泉旅館の工夫：温泉旅館では、管理栄養士の協力で、地元の食材や料理長の技とアイデアを活かし、600kcalで低塩の美味しいお膳を提供する。また、自分にあったご飯の量を計測する。

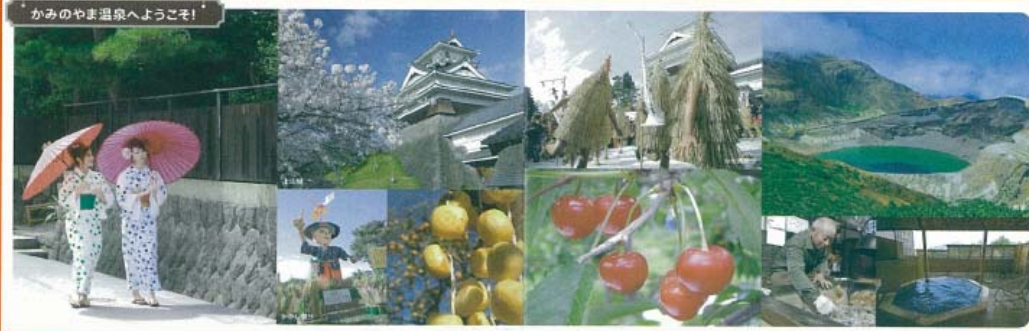
表 宿泊型新保健指導(スマート・ライフ・ステイ)の日程表

	1日目	2日目	3日目
午前	集合・オリエンテーション 健康チェック 自己紹介・アイスブレイク ・プチハッピー & 夢の発表 武家屋敷通り散策	セルフモニタリング 朝日を浴びて早朝ウォーキング 血液検査、朝食 標高 1000m 蔵王高原坊平での気候性 地形療法を活用したクアオルト健康 ウォーキング	セルフモニタリング 早朝ウォーキング 朝食、個別面談 観光プログラム ・オーロラ、ワインブドウ収穫体験 ・未来の自分や家族へのメッセージ 入りフィンラベル製作体験
午後	寺子屋講座(武家屋敷) ・昼食：600 kcal バランス弁当 ・サラバ! 不健康生活、体と心が 喜ぶ食生活 運動実習(旅館) グループワーク(目標設定) 個別面談 温泉入浴、フリータイム	ウォーキング前後で、健康チェック、 唾液検査によるストレスチェック 昼食(600 kcal クアオルト膳) (1泊2日はここまで) リラクゼーション(蔵王坊平高原の爽 やかな風を感じながら瞑想) 体験プログラム(木工教室) 観光プログラム(蔵王温泉大露天風呂)	昼食(こんにゃく懐石) ・日本でここでしか味わえない、驚 きのヘルシー懐石料理 グループワーク 修了式
夜	夕食(600kcal クアオルト膳) ・料理長解説 ・管理栄養士アドバイス リラクゼーション、ヨガ セルフモニタリング	夕食(通常旅館で提供される食事) ・旬産旬消、山形の食を満喫しなが ら、食事指導を実践 ・花笠踊り交流会 セルフモニタリング	



ここでしかできない上質な時間をご提供！

かみのやま温泉 クアオルト（健康保養地）



蔵王とお城と歌人・斎藤茂吉のふるさと“かみのやま温泉”

【山形県上山市のご紹介】



- 開湯 555 余年の歴史ある“かみのやま温泉”をはじめ、蔵王連峰の懐に抱かれ、城下町・温泉町・宿場町の三つの顔をあわせ持つ全国でも珍しいまち
- 果樹や伝統野菜等の旬の食、ワイン、四季折々に姿を変える自然環境など地域資源が豊富
- 標高 1,000m に位置する「蔵王坊平アスリートヴィレッジ」は、東北地方で唯一、文部科学省よりナショナルトレーニングセンター高地トレーニング強化拠点施設に指定
- 人口約 32,000 人、観光入込客数年間約 75 万人・宿泊客数年間約 29 万人
- アクセス ・JR 山形新幹線で東京駅からかみのやま温泉駅 約 2 時間 30 分
・お車で東北中央自動車道利用で東京から 約 5 時間

『クアオルト』とはドイツ語で「療養地・健康保養地」

～単なるウォーキングではなく、まちづくりそのものです～

上山市は先進ドイツに習い、豊かな自然や温泉、旬産旬消の食、医科学的根拠に基づくウォーキングなどを組み合わせた心地よい体験を通して、健康・観光・環境の三つを柱に、市民の健康増進と交流人口の拡大による地域活性化を目的に、全国に先駆けて“心と体がうるおう”長期滞在型の質の高い健康保養地づくりに取り組んでいます。



チェック1 日本唯一の認定コースで

ドイツで行われている運動療法の一つ「気候性地形療法」を用い、頑張らないで運動効果を高めます。心身両面で効果ありという、医科学的根拠に基づいたウォーキングです。

“がんばらないウォーキング”

- ポイントは以下の2つ。
- ①心拍数を測定しながら、自分の体力に合ったスピードで無理なく楽しく歩くこと
 - ②体表面を冷たくサラサラに保つこと

市内には温泉街に近い里山から準高地まで、バリエーションに富んだ、日本で唯一、ドイツ・ミュンヘン大学から認定を受けた8コースを、専任ガイドがご案内します。



チェック2 食べて健康、 身体にやさしい料理

本市は、サクランボやラフランス、紅干し柿などをはじめとした果樹、伝統野菜など食材の宝庫。上山産ブドウを使用したワインも注目！四季折々の旬の食材を活かした身体にやさしい料理を提供します。

弱アルカリ性の泉質で、保湿度成分や美肌成分が含まれ疲労回復をはじめ、「天然の化粧水」に浸かって身も心も美しく。

チェック3

温まりの湯、美人の湯



お問い合わせ

山形県上山市役所 クアオルト推進室
〒999-3192 山形県河崎一丁目1-10

TEL 023-672-1111 FAX 023-672-1112
<http://www.city.kaminoyama.yamagata.jp/site/kuort/>

■取組を計画・実施するにあたっての課題及びその解決方法

- ・国内に同様の事業を実施している事例がなかったことから、「日本型クアオルト」の理念に賛同する自治体（平成 28 年度 8 自治体）により「日本クアオルト協議会」を組織して、まちづくりの指標となる「日本型クアオルト指標」を定めて、各種情報・意見交換を行いながら取組を推進している。

- ・また本市においては、医療費の推移や地域経済波及効果等の事業実施効果の見える化、ビジネスモデルの構築などが課題となっている。実施効果は様々な課題があり、現在その見せ方を研究している一方で、ビジネスモデル構築については、首都圏企業等と連携しながら新たなヘルスケア（健康寿命延伸）産業の創出に着手している。

■取組の関係主体と役割分担

関係主体	役割	その役割を担った経緯
上山市	全体統括（計画策定・財源確保）	市の施策としてスタートしたため
上山市温泉クアオルト協議会*	実行組織	商工会・観光物産協会・旅館組合・医師会・学術機関・まちづくり団体・金融機関などの多職種で組織しているため
日本クアオルト協議会	地域間連携	全国的に日本型クアオルトの普及・拡大を図るため

* 上山市温泉クアオルト協議会

商工会、観光物産協会、旅館組合、医師会、大学などの学術機関、飲食店をはじめとした市内外の各種団体等からの委員で組織し、官民連携して事業に取り組んでいる。

（工夫点）

- ・行政が主導しながらも、市民及び地域事業者等と協力して官民一体となって事業を推進していく体制を図っている点

■取組の予算

○取組全体に要した費用

- ・平成 20 年度～21 年度（初期投資）：内閣府「地方の元気再生事業」約 20,000 千円
- ・平成 28 年度：20,592 千円（上山型温泉クアオルト事業費）、16,422 千円（温泉健康施設関連事業費）

○補助金の活用

- ・平成 20 年度～21 年度：内閣府「地方の元気再生事業」 約 20,000 千円 補助率 10/10
- ・平成 28 年度 内閣府「地方創生加速化交付金」
14,577 千円（上山型温泉クアオルト事業費） 補助率 10/10
16,422 千円（温泉健康施設関連事業費） 補助率 10/10

■取組における事業計画

平成 25 年 8 月：上山型温泉クアオルト構想 策定

平成 27 年～ ：上山市まち・ひと・しごと創生総合戦略

平成 28 年～ ：第 7 次上山市振興計画

- ・平成 20 年度の事業開始当初は、具体的な計画・構想がなかったが、その後、上山型温泉クアオルト構想を策定し、“心と体がうるおうまち”を基本理念に事業を推進してきた。
- ・近年では、将来のまちづくりの指針となる「第 7 次上山市振興計画」においては、上山型温泉クアオルト事業を市政の柱に明確に位置付け、将来都市像を「また来たくなるまち ずっと居たいまち ～クアオルトかみのやま～」とした上で、本計画に基づく予算措置、評価検証を行いながら、庁内各課横断的に事業を推進している。

■ 取組におけるキーパーソンとその役割

段階	キーパーソン	役割
取組の立ち上げ	<ul style="list-style-type: none"> ・小関信行氏（日本クアオルト研究所所長）…上山市に対する事業提案 ・横戸長兵衛 上山市長…事業導入の決定 	取組の立ち上げ
取組の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・小関信行氏（日本クアオルト研究所所長）…上山市に対する事業アドバイス ・横戸長兵衛 上山市長…重要事業としての位置付け、専門部署（クアオルト推進室）の設置・運営 ・富士重人氏（上山市温泉クアオルト協議会会長）…実行組織の取りまとめ 	取組の推進
取組の継続運営	<ul style="list-style-type: none"> ・横戸長兵衛 上山市長…重要事業としての位置付け、専門部署（クアオルト推進室）の運営 ・富士重人氏（上山市温泉クアオルト協議会会長）…実行組織の取りまとめ 	取組の継続運営

■ 関係主体の連携における課題と解決方法

- ・行政が主導している点では、本事業を各種計画内にも明確に位置づけ、ある程度の財源を確保した上で事業を推進している一方で、目的のひとつである交流人口の拡大による地域活性化については民間事業者との役割分担やすみ分けがうまくできていないことから、民間主導によるビジネスモデルの構築につながっていない課題がある。
- ・そこで、特に市民及び民間事業者とのコミュニケーションのさらなる活発化を図り、事業開始10年の節目にあたり、今後のまちづくりについて改めて方向性を定めていく考えである。

■ 取組の効果

○利用者数の変化（かみのやま温泉全体の入込客数）

指標	取組前 平成.19年度	取組後(効果) 平成.27年度
入込客数(日帰り)	85,117人	69,718人
入込客数(宿泊)	382,185人	284,575人

○受け入れ側の意識の変化

- ・ウォーキングを主体とし、健康を全面に出したプログラムでの集客は困難であり、健康度の高いものから、より楽しみを入れ込んだものまで、多様なプログラムを提供する必要がある。
- ・また温泉については、長期滞在を目指す上では、さらなる利活用策の工夫が必要である。

○地域経済への波及効果

- ・クアオルトツーリズム商品を購入するお客様が少しずつ増加し、リピーターにつながっている。

○その他効果

- ・クアオルト体験プログラム（特にカロリーとバランスに配慮した食事の提供）の受け入れができる、また関心を持つ旅館が増加したことや、来訪者との交流による市民のソーシャル・キャピタルの醸成につながっている。
- ・さらには、全国に先駆けた取組であり、注目度が上がっている。

○利用者の評価

- ・総合満足度、再来意向、健康への気付きの有無における顧客満足度が9割を超えている
 - ・参加者自身の健康に対するスタッフの配慮、プログラムスムーズな進行、安心感、健康への気付きを得られた、地域性が感じられるプログラム、温かみのある対応について顧客満足度が9割を超えている
- 顧客満足度が非常に高く、参加者の行動変容に影響を与えるプログラムになっている

※NPO 日本ヘルスツーリズム振興機構が実施した、ヘルスツーリズム品質評価プロジェクト「顧客満足度アンケート調査」(N=230)における評価の概要
プログラムに対する評価の比率

項目	期待(%)	評価(%)
プログラムの実施体制、施設・設備などの安全性	76.4	93.2
プログラム参加により得られる健康に関する有効性	84.0	92.4
楽しさやリフレッシュ、ストレス解消などプログラム参加の価値	81.9	93.2
プログラムの総合満足度	—	95.8
再来訪意向	—	95.8
このプログラムを知人や家族に紹介するか	—	89.9
参加者自身の健康の気づき（高度変容はあると思うか）	—	95.8

■取組継続にあたっての課題、成功のポイント

- ・本事業は市を挙げたまちづくり施策であることから、すぐに成果が出にくい面があることや、市民及び地域事業者等における正しい理解と認知度の不足が課題と捉えている。
- ・そこで、長い眼で見た方向性を市民及び地域事業者等と議論・共有した上で、短期的な成果を積み重ねていくこと、さらには浸透度の一層の向上を図り、本事業に何らかの形で関わる人を増やしていくことで、まずは住む人が誇りを持てる事業に時間をかけて育てていくことが重要と考えている。

■取組実施にあたって国や自治体に期待される役割

- ・市民及び来訪者の的確なニーズ把握と、市民、地域・団体、事業者が事業に関わり活動しやすい環境づくりが求められる。また、財源の確保も大きな役割と考えている。

■取組の今後の計画・目標

- ・「第7次上山市振興計画（平成28年度～）」においても、市政の柱に位置づけており、将来都市像に「また来たくなるまち ずっと居たいまち～クアオルト かみのやま～」を掲げた官民一体となったまちづくりをさらに推進していく。
- ・将来指標として「クアオルト認知度 90%」を目指すほか、具体的な施策として、温泉を活用した温泉健康施設の建設・運営をはじめ、地域資源を活かした市民の総合的な健康づくりの推進、旅行商品化の促進による観光消費の拡大を図っていく。

(2) 城崎温泉におけるまちづくりに関する取組（兵庫県豊岡市）

■「温泉」について

- ・城崎温泉は、半径 500m の範囲中に 7 つの外湯と 70 軒余りの旅館や土産物店が軒を連ねる。古より温泉の入浴効果と山紫水明の美しさに加え、京に近い「京の湯治場」として、貴族、高僧・文人・墨客に親しまれ、温泉の番付は常に関西の上位に位置し、名湯として高く評価された。
- ・温泉街全体を一つの旅館と見立て、「駅が玄関、通りが廊下、外湯が大浴場で商店が売店」というコンセプトのもと、お客様を宿の中に囲い込まず、小さな商店も商売が成り立つ『共存共栄』のまちづくりを進めている。
- ・城崎温泉の正装は「浴衣に下駄」。宿泊客は浴衣に着替え、カランコロンと下駄を鳴らしながら 7 つの外湯をめぐり、柳並木の続く木造三階建の街並みをそぞろ歩く。
- ・初めて来たのに懐かしい、そんな気になる温泉地である。

■温泉地を取り巻く社会状況

① インバウンド効果

- ・年間を通じて外国人観光客の来訪があり、オフシーズンにおける観光入込客数の落ち込みが軽減された
- ・労働力確保の方法が派遣労働から正規通年雇用へ変化

② 労働力不足

- ・後継者不足による旅館等の廃業
- ・旅館の仕事はきついというイメージ（たすきがけ勤務）

③ 木造三階建建築物の保存と活用

- ・老朽化と建築基準法（既存不適格）
- ・火災など災害への備え

④ 民泊新法

- ・安価な料金設定によるサービス低下、風評被害
- ・風紀、治安の悪化

⑤ 閑散期対策と滞留時間の拡大

- ・松葉ガニシーズン以外の閑散期対策
- ・城崎温泉の限界（豊岡市全体での周遊）

■取組の概要

(1) 取組を計画するに至った背景・経緯

◆ 城崎温泉の歴史

城崎温泉は、兵庫県の県鳥である特別天然記念物のコウノトリが足の傷を癒したことから発見された。三方を山に囲まれた狭隘な谷筋を流れる大谿川に沿って 7 つの外湯（共同浴場）が点在し、江戸中期には旅籠として発展してきた。隆盛とともに内湯を希望する声が挙がったが、湯量は十分でなく、温泉は貴重な天然資源であった。

◆ 温泉の管理運営

江戸時代後期に「修進社」と称する宿屋組合ができ、泉源と外湯は宿屋組合で選出された「湯方」が管理運営した。明治 22 年の町村制施行により外湯の経営・維持管理は旧湯島村に継承され、湯方制度はなくなった。明治 28 年、町制施行により城崎町と改称され、城崎町湯島財産区が設置された。

◆ 北但大震災

大正 14 年 5 月に勃発した地震により温泉街が消失。泉源に大きな影響がなく、昭和初期に復興を果たすが、その中心には外湯があり、先人は、外湯を中心とした木の温もりの漂う「和の温泉街」を継承した。

◆ 内湯紛争

昭和 2 年、敷地内に湧出する温泉を旅館内に浴槽を設けて利用する旅館が出現。温泉の利用権を巡る湯島財産区との紛争は、太平洋戦争を挟んで 23 年間に及ぶ。昭和 25 年に和解したが、その際、温泉の利用権はすべて湯島財産区にあることと、外湯と内湯を併置する原則が確認された。

◆ 温泉の集中配湯

湯島財産区直営による集中配湯管理方式を採用

① 目的

- 1) 乱掘防止による源泉の保護涵養
- 2) 温泉地に起こりやすい各種紛争の防止
- 3) 温泉の持つ公共性の強調

② 温泉利用の原則と順位

- 1) 外湯における湯島区民の温泉利用（入浴）
- 2) 訴訟当時の温泉所有者の内湯用温泉
- 3) 和解以降の一般旅館の内湯用温泉

③ 効果

- 1) 温泉の安定供給
- 2) 温泉使用の効率化と配湯量の抑制
- 3) 業務の合理化と勤務条件の緩和

④ その他

宿泊規模により内湯の浴槽の大きさを規制

第 1 次内湯配湯	昭和 31 年 10 月	40 軒
第 2 次内湯配湯	昭和 40 年 10 月	27 軒
その後		32 軒
合 計		99 軒

◆ 参考

① 城崎温泉の起源

- 1) 1400 年前 こうのとり伝説 (鴻の湯)
- 2) 1300 年前 道智上人の 1000 日行 (まんだら湯)
- 3) 鎌倉時代 御所湯
- 4) 江戸時代 一の湯、柳湯、地藏湯

② 泉質

ナトリウム・カルシウム-塩化物・高温泉

③ 浴用の適応症

- 1) 神経痛 2) 筋肉痛 3) 関節痛 4) 五十肩 5) 運動麻痺 6) うちみ
- 7) 慢性消化器病 8) 痔症 9) 冷え性 10) 病後回復期 11) 疲労回復
- 12) 切り傷 13) やけど 14) 慢性皮膚病 15) 慢性婦人病

④ 飲用の適応症

- 1) 慢性消化器病 2) 慢性便秘

⑤ 湯治

明月記 (1226 年 藤原定家) 「木崎湯治 在但馬国」
日本で初めて「湯治」という言葉が使われたのが城崎

⑥ 城崎温泉の 3 恩人

- 1) 香川修徳 … 江戸時代中期の医師。温泉医学の創始者 著書「一本道薬選」
- 2) 柴野栗山 … 江戸時代の儒学者で文人。風光明媚な療養の地として推奨
- 3) 志賀直哉 … 山手線の電車で跳ね飛ばされ怪我。養生の際の体験談を短編小説に発表

(2) 取組の狙い

※この項目では、平成 23 年度をスタートとする過疎地域戦略プロジェクト事業を記載

1. ターゲット

外国人観光客 (但し、中心は欧・米・豪)

2. コンセプト

奇跡の温泉街 “きのさき” の新たな挑戦

3. 関係事業

① 城崎温泉「インバウンド」対策事業

- ・外国語版「旅館予約」システム構築整備事業
- ・もてなし対応人材育成事業
- ・インフォメーションセンター設置事業
- ・英語版観光ガイドブック等作成事業ほか

② 環境整備関連事業

- ・柳並木ライトアップ事業
- ・レンタサイクル事業
- ・湯めぐり巡回バス事業

③ イベント開催事業

- ・イベント花火事業
- ・城崎ゆかたフェスタ事業

- ・城崎温泉ゆかた事業
- ④ 城崎温泉活性化対策事業
 - ・城崎温泉博覧会事業
 - ・木造3階建建築物リノベーション事業
 - ・城崎温泉戦略的まちづくり事業

(3) 主な取組とその特徴

平成22年4月の過疎地域自立促進特別措置法の改正を契機として、過疎債等を有効に活用しながら、過疎地域のやる気と元気をつくりだす取組を進めることとした。地域の自由な発想と自主的な取組を促すため、地域住民による検討をお願いし、その議論の中で提案された事業を中心に計画を策定した。

■取組を計画・実施するにあたっての課題及びその解決方法

- ・計画策定にあたり、コンセプトとなるキャッチフレーズを設定し、その実現にあたっては地域力をフルに発揮できるよう努めた。
- ・コンセプト（キャッチフレーズ）
奇跡の温泉街“きのさき”の新たな挑戦

■取組の関係主体と役割分担

関係主体	役割	その役割を担った経緯
城崎このさき100年会議	まちづくりの企画・提案・承認	平成の市町合併を前に商工会・観光協会・旅館組合・役場でチームを編成。スクラムを組み、力を結集してまちづくりにあたることとした
城崎温泉観光協会 豊岡市商工会城崎支所 城崎温泉旅館協同組合	まちづくりの実施 活動資金の拠出	100年会議の構成団体（具体的な運営は青年部等若手会員が担当）
豊岡市	予算確保、ハード整備	公共性

■取組の予算

詳細は別紙

平成23～27		平成26～28	
ソフト	179,138千円	PR、情報発信	65,567千円
ハード	256,029千円	インバウンド対策	57,198千円
計	435,167千円	計	122,765千円

■関係主体の連携における課題と解決方法

- 情報共有 ⇒ 委員会の定期開催とルール化
- 補助金の確保 ⇒
- 継続性 ⇒ PDCAの確立と責任の分担
- リーダー ⇒ サブを育成

■取組の効果

○利用者数の変化

指標	取組前	取組後(効果)
入込客数(日帰り)	244,400人(平成22)	287,600人(平成27)
入込客数(宿泊)	495,000人(平成22)	673,000人(平成27)
合計	739,400人(平成22)	960,600人(平成27)

○利用者層の変化

- ① インバウンド 1,748人 ⇒ 31,442人(18倍)
若者が増加(卒業旅行) ※感覚的な印象

○受け入れ側の意識の変化

- ① ひと・もの・かねに対する投資の必要性を認識した
② 閑散期を派遣労働に頼っていたが、好調なインバウンドを背景として通年雇用にシフトする旅館が増加

○地域への経済等の波及効果

観光消費額の増加

日帰り @5,360円×43,200人=231,552千円
宿泊 @13,147円×178,000人=2,340,166千円
計 2,571,718千円

○その他効果

- ① 6次産業として多産業に効果
② 基幹産業(外貨を稼ぐ主要な産業)

○利用者の評価

- ① もう一度行きたい温泉地ベスト1
② トリップアドバイザーに温泉地として唯一選定
③ ミシュラングリーンガイドジャポンで2つ星(寄り道してでも訪ねる価値がある)を付与される

■取組継続にあたっての課題、成功のポイント

- ・官民及び民民の対話と共感、そして連携
- ・情報の共有

■取組実施にあたって国や自治体に期待される役割

- ・活動費の支援
- ・先進事例等の紹介

■取組の今後の計画・目標

- ・人口減少に歯止めをかけるため「関係人口」を構築し、城崎における労働力人口を拡大する

(3) 土湯温泉における温泉エネルギーを利用した取組（福島県福島市）

■「土湯温泉」について

- ・磐梯朝日（ばんだいなさひ）国立公園内にある温泉地で、福島駅から40分、福島西ICから20分で行くことができ、国民保養温泉地の指定も受けている。
- ・温泉の泉質も豊富で単純泉、硫黄泉、炭酸水素塩泉、緑礬泉（りよくばんせん）等がある。

■温泉地を取り巻く社会状況

- ・東日本大震災並びに原発事故により旅館が廃業し温泉地としての収容規模が小さくなっている。
- ・また観光客数に関しては、県外からの団体観光客が約1割～2割が戻ってきていない。
- ・65歳以上の高齢化率が高まっているうえに、空き家も目立つようになり持続可能な生活圏維持が大きな課題となっている。

■取組の概要

(1) 取組を計画するに至った背景・経緯

- ・土湯温泉は、源泉から約150度前後で温泉が噴気状で湧出している。そのため、既存温泉に影響を与えることがないことから、反対意見が出ない温泉を用いたバイナリー発電を計画した。
- ・土湯温泉は、要件が恵まれていたためバイナリー事業の実施を達成できた。例えば、その要件のひとつとして、地元住民としても、新しい井戸を掘ることがなく、既存の蒸気泉を活用した事業であることがあげられる。これが、もし地熱発電事業のように、新規に井戸を掘っていたとすれば、達成は難しかったと思われる。実際に、地熱発電を行っている地域の温泉地の情報では、毎年地熱発電用の井戸が枯れるため毎年3本ずつ掘っているなどの話も聞いている。
- ・その他の成功要因としては、蒸気泉であるためバイナリー発電としての効率がよいこと、源泉が温泉街から2～3kmと離れているため、騒音の問題もないことがあげられる。また、水が豊富であった点や電線が既に整備されていたという点も有効であった。
- ・土湯温泉は荒川及びその支流が流れていることから水が豊富である。また、砂防堰堤群が連なっているため、堰堤落差を利用した小水力発電を計画した。もともとのきっかけである小水力発電調査については、国土交通省の要望で「砂防施設を活用した小水力発電」として行ったもので地元からの要望ではない。また、国土交通省としても調査は行うが、実行は地元ですることになっていたが、あまり意欲的ではなかった。しかし、震災があったため、それがきっかけとなるなど、タイミングが重なったのは事実である。
- ・また、バイナリー発電や小水力発電のみにとどまらず、これらの再生可能エネルギー事業を活かした地熱体験によるエコツーリズム事業や、温泉熱を活用したエビ養殖事業を導入し、新たな産業創出にも取り組んでいる。

(2) 取組の狙い

- ・地方の小さな温泉地が復興再生のまちおこしとして知恵と創造を駆使し再生可能エネルギー事業とそこから派生するいろいろな取組をモデル地域として日本全国の多くの方に見てもらおうべくターゲット層の絞り込みはしていない。
- ・時期・職種ごとに視察・研修・体験・まちづくり交流などの目的によって受け入れ体制を整え、お客様へアプローチをかけている。基本は宿泊滞在していただけるよう働きかけている。年間2000名程度が日本各地から視察等に訪れている。

(3) 主な取組とその特徴

- ・ 視察、研修、体験、個人、団体、専門性など様々な要望で受け入れしている。単に、再生可能エネルギーの紹介ではなく、ここまでに至る経過とこの事業を進めるための組織づくり、資金確保などをトータルの取組を紹介している。
- ・ 体験ツアーでは温泉熱のおもしろさを体験できる工夫をこらし、温泉という自然の恵みを訴えかけている。



土湯温泉 バイナリー発電



土湯温泉 小水力発電



完成した養殖施設に展示された養殖エビ



養殖のための熱交換システム全景

■取組を計画・実施するにあたっての課題及びその解決方法

- ・ 土湯温泉の再生可能エネルギー事業は国立公園内、保安林指定内、国有林内、砂防指定内と様々な法規制があり、それらをクリアするのに大変な労力と時間を要した。行政事務で縦割りの指導が横行しており遅々と進まないものもあった。そのため、行政側から地元というよりは、地元からの具体的な要望をベースに、自治体側行政を強引に巻き込んで実施していくというスタイルになっている。
- ・ 震災被災からの復興再生という強い意志と行動により実現まで漕ぎ着けてきた。縦割り指導をする役人の中に、どうすれば法的クリアをできるのか真剣に考えてくれた行政マンがいたことも課題解決につながった場合もあった。

■取組の関係主体と役割分担

関係主体	役割	その役割を担った経緯
土湯温泉町復興再生協議会	地域住民との意見交換組織	震災直後からの温泉町の再生について協議
湯遊つちゆ温泉協同組合	バイナリー発電事業推進のための温泉熱・冷却水提供	導入前の環境省委託事業の遂行や発電事業実施のための会社設立出資
NPO 法人土湯温泉観光まちづくり協議会	エコツーリズム事業や行政と連携した復興再生のためのまちづくり計画の遂行	廃業した旅館の解体処理や空き家の買収、発電事業実施のための会社設立出資
(株)元気アップつちゆ	民間企業によるまちおこし	再生可能エネルギー事業の親会社、エビ養殖事業等

(工夫点)

温泉組合とNPOが共同出資で民間ベースのまちづくり株式会社を設立したことにより、制約の無い民間発想での地域づくりができるようにした。

■取組の予算

再生可能エネルギー事業 約10億円 (バイナリー6.3億円・小水力3.5億円)

償却期間 バイナリー10年・小水力15年

■取組におけるキーパーソンとその役割

段階	キーパーソン	役割
取組の立ち上げ	土湯温泉町復興再生協議会・地域住民合意	取組の立ち上げ
取組の推進	地域内の各団体が連携・国県市の補助金、委託事業フル活用	取組の推進
取組の継続運営	<p>主な団体が出資して会社設立</p> <p>団塊の世代といわれるキーマン3名による強いリーダーシップ</p> <p>各取組の成功が新しい産業を生み、収益を生み、雇用を生むことにより定住人口の増加、持続可能な温泉観光地づくりという最終目的が明確されている。</p> <p>これら一連の取組が、国交省の社会資本整備事業補助金を活用し、福島市と共同で温泉街のハード整備を進めている。ハード整備後のソフト事業は売電収益を元に地域に還元できる体制づくりがなされている。</p>	取組の継続運営

■関係主体の連携における課題と解決方法

- 土湯温泉は様々な法的規制地域でその許認可の手続きと時間が取組推進の上で大きなロスであり課題のひとつであった。各取組は収益第一ではなく、被災したこの温泉街を復興させるためにやっているということ¹をあらゆる政官民学に訴え続けてきた。高齢化率が高い地域ではあ

るが、地域住民全員がこの取組等に関与または関係していることを共有できる体制づくりに心がけてきた。

■取組の効果

○利用者数の変化 震災前と比較し旅館数が4軒減少

指標	取組前	取組後(効果)
入込客数(日帰り)	53,028	72,759
入込客数(宿泊)	219,386	119,646

○利用者層の変化

・再生可能エネルギー事業により政治、行政、大学関係者が多く訪れるようになった。福島県内からのお客様は震災前と変わらず訪れるようになっているが、関東圏からの団体観光客は増える傾向にない。

○受け入れ側の意識の変化

・お客様の動向、興味等を調査するようになり、それを改善していく意識に変わってきている。

○地域への経済等の波及効果

・再生可能エネルギー関係だけで年間2000人が訪れ、その約6割は宿泊に繋がっている。また、多くのマスコミにも取り上げられ宣伝効果が抜群である。

○その他効果

・いま同時並行で進めている都市再生整備計画事業の温泉利用や観光誘客などにも貢献できる。

○利用者の評価

・この温泉地は地域内が団結連携し、前を向いているという評価を得ている。

■取組継続にあたっての課題、成功のポイント

・現在取り組んでいる事業は、維持管理が大切な事業ばかりである。正確な維持管理ができる人員数の確保と人材育成が成功のポイントになる。また、地域との合意・創意に基づいたまちづくりが必要である。

■取組実施にあたって国や自治体に期待される役割

・画一的な支援だけではなく、地域の実情に合った細やかな支援と指導を期待したい。特に、許認可等について法律を盾にとるのではなく、その地域はどうしたら一番良いのかその都度考えてほしい。

■取組の今後の計画・目標

・何よりも持続可能な生活圏の維持確保が大きな目標である。
・そのため、今後も、現在行っている再生可能エネルギー事業で得た売電収益を、まちづくりや定住人口・交流人口を増やす事業などに展開していく予定である。

(4) ニセコ温泉郷におけるアクティビティを活かした取組（北海道ニセコ町）

■「ニセコ温泉郷」について

- ・冬季はスキーなどを楽しむ外国人観光客、夏季は温泉やアウトドアアクティビティを目的に国内観光客が来訪する地域。地域内にはさまざまな泉質の温泉が点在しており、効能の異なる温泉を楽しむことができる。

■温泉地を取り巻く社会状況

- ・国外からの来訪が増加する 12月～3月の冬季と、8月を除く夏季の宿泊客数の差が大きい。
- ・バブル崩壊後、スキー利用者は減少していたが、2001年の世界同時多発テロ以降はインバウンドが増加（オーストラリア、香港、中国、台湾など）
- ・冬季は特にスキーを目的とした外国人旅行者が多く、半年前からの予約で施設受入がいっぱいになっている。そのため、日本人旅行者が予約できない場合がある。

■取組の概要

(1) 取組を計画するに至った背景・経緯

- ・戦前、戦後と温泉地として栄え、国民保養温泉地としても指定されている。その後、温泉場とは別にスキー場建設が進み、ホテル等のリゾートエリアを形成し、温泉場は衰退。
- ・スキー観光の進展により夏季と冬季のギャップが課題となり、夏季体験コンテンツ（カヌー、ラフティングなど）の開発が進んだ。また、東アジアを対象に誘客活動も行った。
- ・観光庁の観光カリスマであるロス・フィンドレーがアウトドアアクティビティを事業化。平成8年頃には複数社によるアクティビティ提供が可能となり、夏季のアウトドアや体験観光が注目されるようになった。
- ・近年のインバウンド急増で冬季の入込が集中。宿泊者数の平準化が大きな課題になっている。

(2) 取組の狙い

- ・冬季は外国人観光客が多いため、外国人の周遊性を高める
- ・夏季はリピーターの利便性を高めることで、通年での平準化を図る

(3) 主な取組とその特徴

○周遊バス（ニセコ周遊バス）の運行（冬季）

- ・点在しているスキー場等のアクティビティエリア、宿泊施設、飲食店、日帰り温泉を楽しむよう周遊バスを運行

○湯めぐりパスの発行（通年）

- ・複数の温泉施設で使えるお得なパス券を広域エリアで作成
- ・何度も使えることで、リピート回数を増やす、満足度の向上を図る

○民間事業者の取組支援

- ・起業化等に対する財政支援（町補助金）の実施
- ・宿泊施設への定期的な情報の共有・提供

○インバウンドの方々への配慮

- ・役場商工観光課に国際交流員を配置（PR 実施、外国人観光客への対応など）
- ・案内表示のピストグラム化（さまざまな国からの観光客に対応するため、施設などの案内表示にイラストによる視覚記号であるピストグラムを採用）
- ・施設ごとの外国人旅行者に対する困りごとなどの解決（表示物作成、翻訳補助など）を町が支援

また、以前は国外の方へのニセコ町 PR やスノーリゾートの調査として北米地域（ウィスラーや、ベール、アスペンなど）の事例調査を実施（現在は誘客をメインとした活動は積極的に実施していない）

■取組を計画・実施するにあたっての課題及びその解決方法

- ・外国人利用者への配慮が必要であった
→バス運賃をワンコイン化（500 円）にするなど、支払方法を明確にすることで支払い時の混乱を回避。
湯めぐりパスもシールをはがして支払うわかりやすいシステムとした。

■取組の関係主体と役割分担

関係主体	役割	その役割を担った経緯
町	点在するアクティビティや施設の周遊環境整備	町観光施策の支援
	事業支援 (財政支援、翻訳補助等)	
民間事業者	アクティビティと宿泊施設をセットにしたお得なメニューの提案（販売）	以前から事業者主体で事業を実施
	スキー場が連携した統一利用券の発行、スキー場施設間移動の為のバスの運行	

（工夫点）

民間事業者、町の役割を明確にしたうえで、取組を実施する

■取組の予算

約 800 万円（補助金含む）/年

※ニセコ周遊バスの取組に関する予算

■取組に要した補助

交付主体	補助金名 (事業名)	補助率	補助対象
北海道観光振興機構	地域観光活性化促進事業	対象事業費の 5 割 (上限 200 万円)	運行委託料ほか
ニセコ町	補助金	定額	バス運行費

※ニセコ周遊バスの取組に関する補助。

■取組におけるキーパーソンとその役割

段階	キーパーソン	役割
取組の立ち上げ	観光協会、町担当者	必要性の検証、効果・コストの検証
取組の推進	観光協会	運行管理
取組の継続運営	観光協会	運行企画（見直し）、管理

■関係主体の連携における課題と解決方法

- ・ニセコはエリア広く、バスの運行経費は高額となる。そのため、温泉施設等が負担する範囲内では経費捻出が難しい
- 北海道観光振興機構や町で支援

■取組の効果

○観光入込客数の変化

指標	取組前 (平成 25 年)	取組後 (平成 28 年)
入込客数（日帰り）	367, 298	368, 750
入込客数（宿泊）	1, 201, 906	1, 302, 552

※入込客数の変動に関しては、周遊バス導入以外の影響もある

○利用者層の変化

- ・スキー目的の外国人客の増加（温泉を知らない来訪者も宿泊施設にて温泉を利用）。利用することで温泉の魅力が伝わりファンが増加している

○受け入れ側の意識の変化

- ・来客者の満足度向上のための環境づくりをいかに行うかをより意識するようになった

○地域経済への波及効果

- ・観光客が1つの箇所にとどまらず周遊し、食事や買い物を行っており、波及効果がある

○利用者の評価

- ・利用者の約8割はリピーターとなっており、利用者の満足度も高い

■取組継続にあたっての課題、成功のポイント

- ・制度の柔軟な見直しを行うこと
- ・施設の新設や変更への対応や、事業者が継続的に参画できるような一定の利益がある制度設計を行うこと
- ・先を見据えた事業の受け入れを行うこと
- ・時代の変化に対応できるよう、町外の方々を含め新規事業の提案がしやすい地域（環境）作りを行うこと

■取組実施にあたって国や自治体に期待される役割

- ・温泉をはじめとしたニセコ地域の観光資源は、点在しているため、それらを結び周遊できる交通体系の確保等、仕組みなどの支援

- ・誘客をしても、利用先である温泉施設等の環境が整っていなければリピーターにつながらない。そのため、設備更新など施設環境整備に関する支援

■取組の今後の計画・目標

- ・さまざまなイノベーションが起こっているなか、町としてもこれまでとはスタンスを変えた計画が必要であると考えている
- ・現状、コアとなっている事業をいかに水平展開していくかの検討を行う必要がある。
- ・来訪者の満足度向上を目指す

(5) 玉造温泉における温泉の効能を活かした取組（島根県松江市）

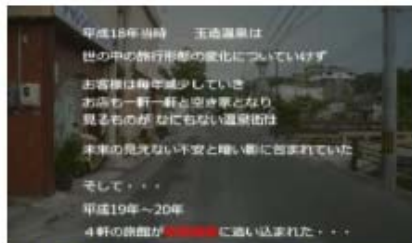
■「玉造温泉」について

- 玉造温泉は、西暦733年編纂の「出雲国風土記」に『川辺に湯が沸き老若男女が賑わった』と記されている。1300年前には、すでに名湯として賑わっていたようであり、正式な開湯は定かではないことから、日本最古の湯のひとつとなっている。
- また、出雲国風土記では、『一度入浴すればお肌が若返るようになり、二度浴すればどんな病も治癒してしまう。その効能が効かなかった事は聞いたことがないので、人々は神の湯と呼んでいる』と記されている。1300年前にはすでに美肌に関心があり、化粧品の乏しい時代に「天然の美容ツール」として重宝されていたということを示している。このことは評判として都に伝わり、枕草子にも玉造温泉が記されている。
- 現在も、「美肌・姫神の湯」をテーマとしてPRしており、以下のような特徴について、テーマに沿った魅力化を行った。
 - ①化粧水のような潤い泉質
 - ②1300年前すでに美肌温泉と呼ばれていた（出雲国風土記 733年編纂）
 - ③平成22年に調査機関により高い潤い美肌作用が立証された（サティス製薬／埼玉県調べ）



■温泉地を取り巻く社会状況や課題

- 玉造温泉は、昭和からバブル期に向けて大型旅館化などの開発が行われた。
- しかし旅行形態の変化（団体旅行→個人旅行）になかなかついていけずバブル期以降は温泉街も旅館も衰退傾向となり、平成19年には4軒の旅館が経営破綻となった。



【10年前の玉造温泉の様子】旅行形態の変化（団体→個人）に対応できず、寂れた温泉街となっていた。。

- 「このままでは1300年続いてきた玉造温泉が無くなってしまう」という危機感が生まれた。
- その後、平成19年ごろから官民一体となり、従来の観光行政施策からまちづくりによる観光振興へシフトした。

■取組の概要

(1) 取組を計画するに至った背景・経緯

- まちづくりのテーマを「美肌・姫神の湯玉造温泉」とし、そのテーマに沿った資源活用を計画した。
- 魅力化された温泉を効果的にPRすることに工夫した。
- 特に、「玉造温泉の良さを入浴することで知ってもらおう」といった旧態依然のPR方法（ポスターやイベントなど）では効果的なPRは望めないと考え、「玉造温泉を自宅で毎日入浴できる方法」「玉造温泉に来られる前に入浴して美肌作用を実感する方法」という全国的にも先を行くようなPRを計画した。

(2) 取組の狙い

- ・平成 19 頃から 20 代～30 代の女性をターゲットとした展開を図り、美肌温泉を活用したコスメを作成。通販での販路を展開した。

(3) 主な取組とその特徴

① 美肌温泉をまちづくりのテーマに設定（平成 19～）

このまちにしかないオンリーワンの観光素材をテーマにしないと埋もれてしまう

- ・まず、約 1300 年前に美肌温泉と出雲国風土記に記されていたことに着目し、『美肌・姫神の湯』というテーマを設定した。松江市と地域が一体となったハード・ソフト事業を両立させたまちづくりをスタートする。



○美肌温泉のテーマづくり／流行や他地域の物まねではなく、地域の資源を見直しオンリーワンの素材を見つける

② 地域DMOのモデルと評価されるようになった組織の改革（平成 19～）

観光協会と旅館組合の事業やイベントが重複してムダが非常に多い

- ・このままでは生き残れないという危機を感じ、覚悟を決めた既存の組織改革を断行した。
- ・司令塔はこれから観光協会が担っていくために、まずは事務局体制を一新し、役場から周藤實氏をキーマンとして登用。事務局は毎月役員会を行い、重複していた事業、イベント、予算のムダを精査した。
- ・観光協会が司令塔となることにより、それぞれの組織が役割に応じて事業と予算を集中させた。その結果、重複していたイベントやPRが整理され、各組織に自然と振り分けがなされ、それぞれの組織が効果的に事業を行えるようになった。
- ・併せて、各組織がそれぞれに収益事業を活発に行い、自主財源が増加した。特に観光協会は、事業収益が 20,000 千円を超え、全国的にも珍しい「稼ぎを生む観光協会組織」となっている。
- ・この取組が現在、各地で設立されている日本版DMOの理想モデルとして評価された。



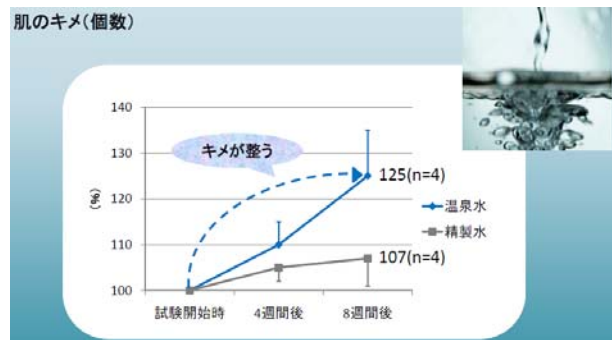
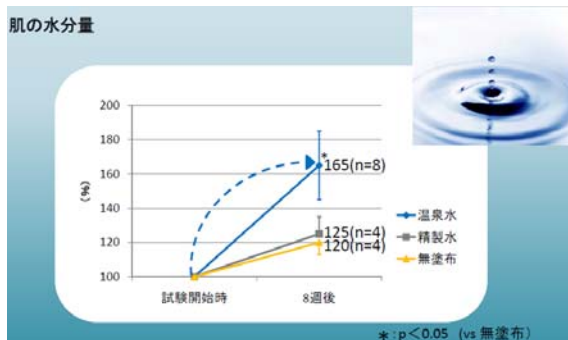
○観光協会を中心に役割分担しながら地域に経済効果を生んでいる

産・官・民の役割分担と協力体制ができた玉造温泉の組織見取り図

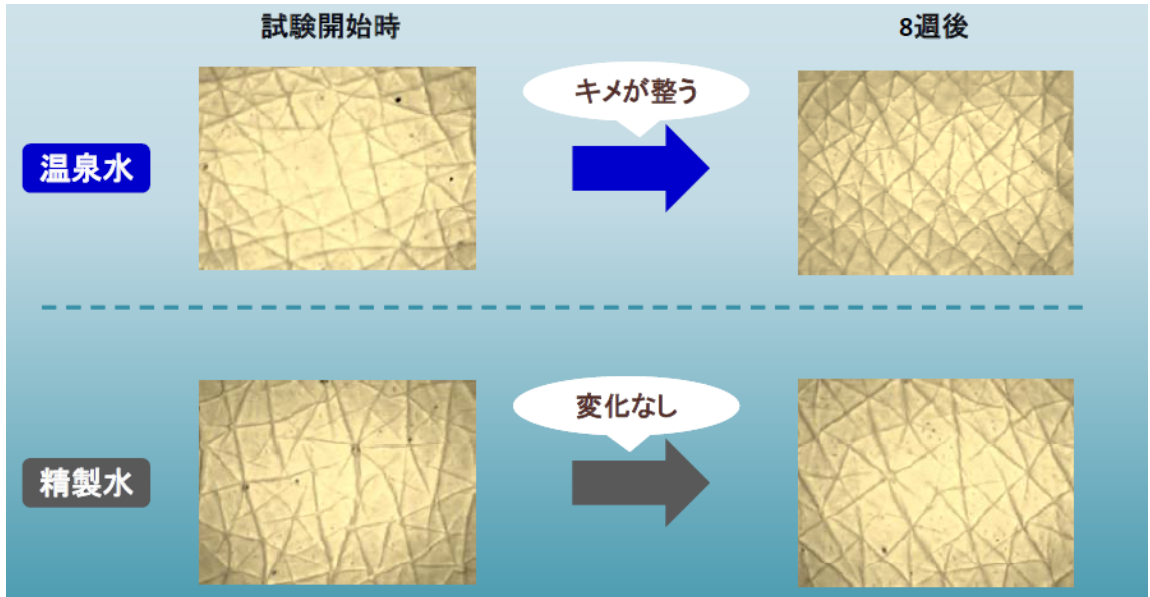
③ 美肌温泉の検証（平成 20～）

はるか昔に美肌温泉と呼ばれていた・・・だけでは発信力が足りないのでは？

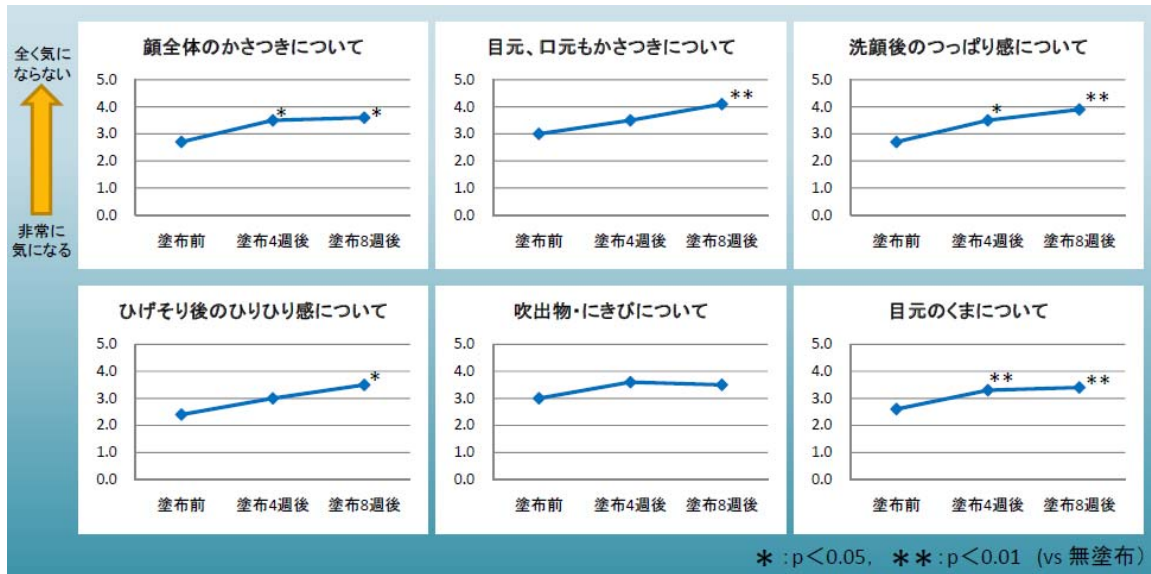
- ・この課題を解決するため、専門家を招致し、泉質を検証した。また、化粧品なども制作している調査機関（サティス製薬）に温泉の美肌作用を調査依頼した。
- ・被験者に温泉水もしくは精製水を塗布した場合、温泉水もしくは無塗布とした場合の2種類の試験を行い、それぞれの皮膚水分量、経表皮水分蒸散量、皮膚弾力性、レプリカ法によるキメ観察、使用感に関するアンケートにより評価した。
- ・その結果、「肌にうるおいを与える作用が高い、化粧水のような温泉」との評価が出た。



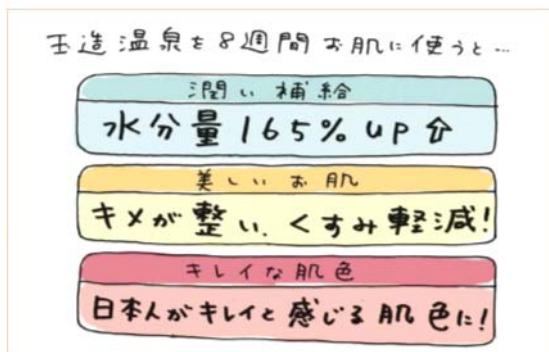
- 肌のキメの増加も確認された（下図：肌のキメ画像）。



- また、アンケートでも「温泉の持つイメージ」と「温泉水使用効果」が一致し、特に、保湿に関連する項目では満足度の高い結果が得られた。



- この結果により、「美肌・姫神の湯玉造温泉」のテーマに沿ったまちづくりが加速する。



○1300年前に美肌温泉と呼ばれた温泉が、今も変わらず湧き続けていることに誇りと自信を得た調査となった。

④ 温泉を活用した基礎化粧品の開発、販売（平成 21～）

「玉造温泉は現在最古の美肌温泉の記述」と「科学調査による国内有数の美肌温泉」

- ・この2つのPRコンテンツを得たが、既存のPR方法では到底効果は期待できないと考え、観光協会のマネジメントで松江市と民間まちづくり会社が協力して「玉造温泉美肌研究所 姫ラボ」を設立した。（民間 100%出資）
- ・このラボで平成 22 年から温泉水を活用した化粧水やクリームなど、次々と約 20 商品を開発した。
- ・温泉街に専門店舗と通販サイトを開設し、販売開始から 6 年には、年商 3 億円を超え、雇用人数も 2 名から 40 名へと急成長した。
- ・この事業は、厚生労働省のふるさと雇用再生特別基金の成功モデルのひとつと評価された。
- ・また、通常とは逆の発想で、他社のコスメにも玉造温泉の温泉水を提供した。
- ・こうした結果から、玉造温泉だけでは到底できなかった、TV、新聞、雑誌などの広告に幅広く掲載され、美肌温泉としての知名度が飛躍的に向上し、あわせて姫ラボの売り上げもアップした。



○姫ラボの温泉コスメ 年間販売数は 30 万個を超える



○姫ラボを運営する(株)玉造温泉まちデコ 社員数は 6 年で 2 名→40 名に急成長。
しかも社員の 9 割が女性。温泉街の店舗拡大と雇用創出の役割を担う。



○温泉街に専門店を開設



○友人への土産用商品



○通販サイトも充実



○姫ラボをゼロから作った
藤田智加 店長。
県外から U ターン
女性が活躍する会社の
リーダーとして毎日楽しく働いている。

コスメを活用した PR

- ・玉造温泉を自宅で毎日使ってもらうには？玉造温泉に来る前に温泉入浴してもらうには？
を実現した美肌温泉PRの仕組み

【お客様の流れ】

- ① 玉造温泉に入浴して、化粧水のような温泉を体感する
- ② 温泉街の姫ラポ（温泉コスメ）のお店に行き、自分用のお土産としてコスメを購入
- ③ 自宅で毎日使うことで、ますます玉造温泉が好きになる
- ④ コスメを1本使い切ったネット通販で購入。通販で届いた時にさらなる仕掛けで玉造ファンに誘導
- ⑤ ②のときに温泉街のお店でお友達のお土産にも購入
- ⑥ お土産でもらった友達は、行ったことのないのに玉造温泉の良さを知る
- ⑦ ④と同様に友達もネット通販で購入。玉造温泉に行ったことが無い方にもファン化
- ⑧ 玉造温泉に旅行に行きたくなる
- ⑨ 【別ルート】他社のコスメでも玉造温泉を知り、玉造温泉に行きたくなる
- ⑩ 【別ルート】TV,新聞、雑誌などで美肌温泉を知り、玉造温泉に行きたくなる

○以下、美肌温泉の取り組みによるお客様の循環図



⑤ テーマとターゲットに沿ったまちあるき観光事業（平成 20～）

「温泉街にお店がないから人が歩かないのか？」そうではない、「まちに魅力を持たせれば人が歩き、自然とお店を増えるはず」

- ・このような課題から、観光協会は、まずは、観光客が行きたくする目的地を作ること考えた。しかし莫大な予算をかけたハコモノは時代に合わないと考え、温泉街に昔からある地域資源に磨きをかけていくことに着目した。
- ・まちづくり会社とともに、玉作温神社（願い石・叶い石）、清厳寺（おしろい地蔵）などをプロデュースした。
- ・その結果、目的地ができた温泉街には、まちあるきを楽しむ観光客が増加し、温泉街の雰囲気は急速に明るい雰囲気に包まれた。
- ・グッズの制作は、障害者施設に依頼し、障害者の社会参画にも貢献した。



願い石（玉作湯神社）



おしろい地蔵（清厳寺）



○地域の資源をテーマに沿ってターゲットに合わせたプロデュースを行った。

目的地が出来たことで温泉街を歩かれる観光客が増加し、新規出店者も年々増加し 20 店舗が新たに開店した。



○叶い石やおしろい地蔵祈願札は障がい者施設にて制作。障がい者の雇用につながっている。

⑥ 時代に合った顧客目線の情報発信（平成 21～）

時代遅れのPRはムダ。考え方をゼロから改めて、ターゲットに届くPRを

- ・このように考えた観光協会は、観光行政時代から続く、従来のチラシやポスターなどのPR物を平成21年にすべて廃止した。
- ・そして、「姫神さまのふりーページ」を季節ごとに年4回発行し、着地型観光パンフレットとして、周辺観光情報や温泉街の情報、季節のイベントなど、常に新しい目線で掲載する媒体とした。



○H28現在31号を発行。60,000部×年4回発行する人気ふりーページへと成長した。

旅行を考えていない方や旅行意識の低い方にも届くパンフレットの作成

- ・ターゲットを玉造温泉への旅行を考えている方だけでなく、潜在的なターゲットも含めてのPRが必要であったことから、平成22年からパンフレットのリニューアルを図った。
- ・そこで、写真を一切使用せず、イラストだけでパンフレットを作成した。まるで絵手紙集のようなパンフレットは、訪れた人が友達へのお土産として渡すようになり、玉造温泉に興味のない方の手にも渡っていった。



○まるで絵手紙集のようなパンフレット。手にした観光客が「かわいい！」と友達へのお土産に渡されるようになり玉造温泉に興味のない方の手に渡るパンフレットとなった。発行開始から好評となり発行部数もリニューアル前と比べ4倍となる12万部を発行している。

お客様が玉造温泉の魅力を広めてくれるのが理想

- ・お客様が撮る写真がSNSを通じて広く拡散していくということに着目し、フォトジェニックな場所をつくることとした。
- ・リニューアルが必要となっている温泉街の看板を、写真を撮りたくなるようなデザイン、お客様が温かい気持ちになれるようなデザインとした。



○話しかけてくるような温かい看板は写真撮影スポットとなる。また、「なんでこんな情報？」というシュールさも人気となり、多くのSNSでお客様が勝手にPRをしてくださるようになった。

⑦ 観光イベントのプロデュース（平成 21～）

1日限りのイベントではもはや時代に合っていない

- ・従来行ってきたのは、ほとんどが1～2日のイベントであったが、そこに莫大な予算を投入しても、その日来訪したお客様しか楽しめず、継続的な誘客にはつながらないと判断し、平成 21 年に全面的に廃止した。
- ・精査した予算により、45 日間連夜行う夏祭り「タマステージ」を企画した。第 1 部は地元ミュージシャンのステージ、第 2 部は日本一を受賞した安来節ご一行のショーを手配した。
- ・また、子供向けのキッズ夜店を併設し、この 2 つを 45 日間毎夜行うことで、いつ来ても楽しめるイベントとなった。
- ・このタマステージは、平成 28 年に 8 年目を迎え、今ではお客様に驚きと感動を与える巢ベントへと成長した。
- ・このイベントにより、7、8 月の宿泊数が平成 21 年と比較し、平成 27 年は 10,000 人増加し、稼働率も 5 年連続 90%を超えるトップシーズンへと生まれ変わった。



毎夜超満員のタマステージ。45 日連夜開催でお客様の驚きと感動を呼ぶ。



安来節とじょうすくいショー



地元ミュージシャンステージ



運営は旅館組合、観光協会、飲食店組合が一丸となって45日行う。



子供向けのキッズ夜店。射的やダーツなどの料金は一律200円としている。良心的な価格設定が満足度と思い出作り演出している。



タマステージをその場でWEBにて生配信。また、アーカイブス(記録)をYOUTUBEで見ることが出来る。

〇8年が経ち、7月と8月の合計宿泊者数はH21当時に比べ約10,000人増加。8月の部屋稼働率は90%を超える。

⑧ 観光協会の自主財源確保と美肌温泉のPR (平成21～)

「お客様に喜んでいただく」を迫及し、収益事業の売上をあげている

- ・観光協会は、活発に収益事業を行い、年間2,000万円近い収益をあげている。
- ・その代表的な事業である「おやしる本舗」は、ユニークな発想から生まれた。温泉街には源泉が湧くポイントがあり、その源泉をペットボトルに汲んで帰っている人を見かけ、話を聞くと、温泉があまりにもよかったので持って帰るということであった。そこでひらめいたのが「美肌温泉をテイクアウトできる美肌温泉ボトルを販売する」という収益事業であった。



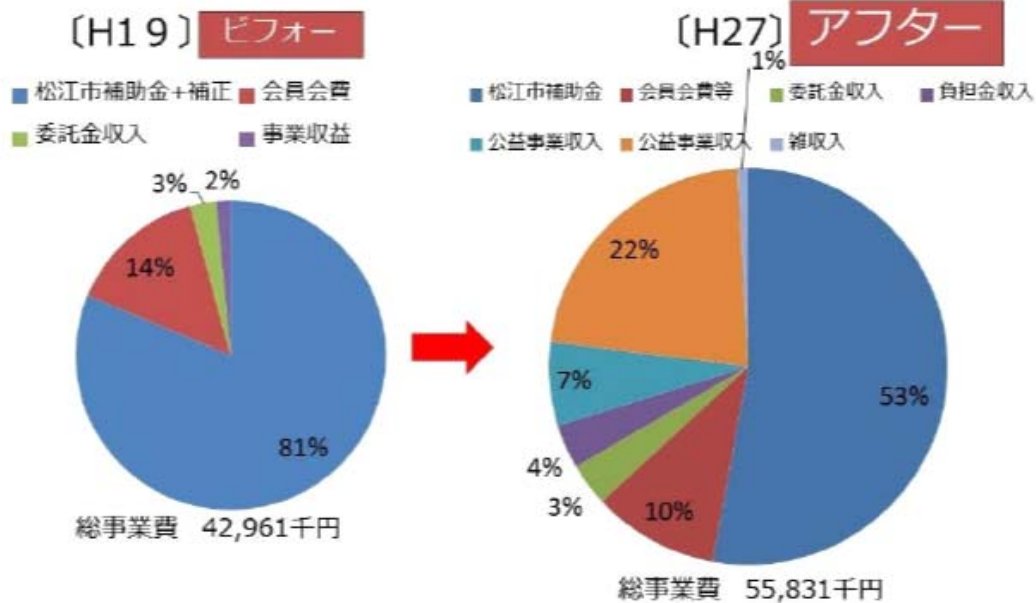
温泉をボトルに汲んでテイクアウト。



無人販売スタイルが田舎の平和な雰囲気演出

〇美肌温泉ボトルは美肌温泉そのものをお土産にされるため、泉質の良さがと知名度のUPに繋がっている。

- ・無人販売方式ということの話題性も重なり、年間約4万本を超える販売数となっている。このおやしる本舗事業は、観光協会の収益事業の主力となっている。
- ・結果、補助依存率も82%⇒53%となり、自立する観光協会となった。



自主財源が約21,032千円増えたことで、自己財源比率が約53%となった



○収益事業は日々の温泉街パトロールから生まれる。毎日お客様も観察することで、何をすれば喜んでいただけるかが見えてくる。その結果、ご褒美のごとく収益があがる。

⑨ 姫神ガールと温泉ビューティアドバイザー制度の取組（平成23～）

旅館スタッフの一人ひとりの意識を変え、美肌温泉を大切にPRしていく体制

- ・観光協会の作ったイベントや企画が、旅館スタッフが知らないという課題があった。
- ・そこで、美肌温泉PRを目的に旅館女性社員によるPR隊「姫神ガール」を結成した。また、専門家による温泉ビューティアドバイザー制度を活用し、温泉街で働くスタッフの知識やおもてなし力の向上、美肌温泉グッズの開発を行った。また、旅館社員の人材育成を目的に「姫神塾（全7回）」を毎年実施している。
- ・その結果、徐々にスタッフの意識が高まり、自然と美肌温泉の話ができるようになった。



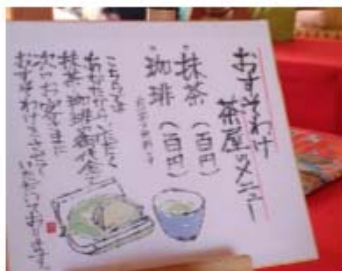
○PRは旅館組合が主体となって、現場のスタッフ一人ひとりが同じ意識でおもてなしを目指す。

姫神ガールから発案された温泉フェイスバック用のタオルは在庫切れとなるほどの人気商品となっている。

⑩ 地域住民のまちづくり参加（平成 23～）

住民の顔が見えるあたたかなおもてなしこそ、観光客の感動する地域の宝

- ・地域の人とのふれあいが、旅における感動をつくると考え、平成 23 年、有償で地元のボランティアを募り、おすそわけ茶屋事業を開始した。
- ・約 30 名の応募があり、日替わりのシフトでお茶屋の運営を開始した。抹茶やコーヒーを 100 円で提供し、時には漬物やお菓子などをおすそわけしている。
- ・接客は未経験であったが、お客様とのこころあたたかなふれあいの場を作り、事業開始から来客数が年間 2 万人を超え、5 年目の平成 28 年は来場者数が 10 万人を超えている。



〇ちょっとお茶でも飲んで行かんかね？と温かいおもてなしが人気。有償ボランティアでの雇用も拡大している。
なお、有償ボランティアの件費の財源は観光協会の収益事業「おやしろ本舗」から捻出。持続可能な仕組み。

⑪ オフシーズン（冬期）対策（平成 22～）

大学生による大学生の卒業旅行のプロデュース

- ・冬期はオフシーズンとなり、閑散としていたが、平成 22 年ごろから少しずつ大学生のグループを見かけるようになったため、オフシーズン対策として、大学生の卒業旅行をターゲットとした。
- ・旅館組合では、「大学生に玉造温泉を知っていただくためには、まず大学生の生活を知ることからはじめよう」と考え、大学生とのワークショップやヒアリングを重ねたところ、大学生特有のコミュニティや情報収集のあり方があった。
- ・そこで、大学生による PR 作戦を実施し、これを年々拡大させた。その結果、オフシーズンには大学生の卒業旅行で温泉街があふれることとなった。



地元の島根大学生がパンフを作り他県の大学へ送付することで大学も協力的に PR くださる。



都会では大学生が発行する大学生のためのフリーペーパーがある。そこに記事タイアップした。



Twitter やインスタグラムなどの SNS で発信力の高い学生を招き、学生への PR を行う。

■取組の工夫ポイント

- ・温泉コスメを旅館の売店に置かなかつた
- ・温泉街に専門店をつくり専門スタッフを配置した

・通販につなげた

*温泉を活用したコスメ事業は全国の温泉地で行われているが、玉造温泉ほど成果を出している事例は今のところ無い。そこには深い秘密がある。

■取組を計画・実施するにあたっての課題及びその解決方法

○資金と雇用について

- ・スタートする際に「ふるさと雇用再生特別基金事業（厚労省／平成 21～平成 23）」を活用した。これにより安定的に事業の拡大が出来た。
- ・また、助成金で雇用した 2 名は幹部社員となり、その後約 40 名の雇用拡大につながった。

■取組の関係主体と役割分担

関係主体	役割	その役割を担った経緯
観光協会	マネジメント、プロデュース	官民を連携させていくための司令塔としての役割を果たすべく、マネジメントを行った。
旅館組合	PR、プロモーション	取材対応、旅行会社の対応などのほか、広告、PR隊の結成、キャラバンなどの事業を担当している。
NPO 湯の郷たまゆ	地域住民のおもてなし	おすそわけ茶屋の運営するボランティア組織。住民と観光客のふれあい事業を担うべく担当となった。
㈱玉造温泉まちデコ	雇用と産業の創出	旅館経営者など 6 名が出資（ポケットマネー）したまちづくり会社。玉作温泉神社のプロデュースのほか、温泉街に 4 店舗を経営し、雇用と店舗拡充を担当している。
玉造温泉活性化プロジェクト会議（平成 19～23）	ハード整備	国交省のまちづくり交付金を活用したハード整備の方向性とソフト事業の融合を担当した。
地域住民	環境整備ボランティア	足湯清掃、トイレ清掃、玉湯川除草などの環境整備を担当した。
NPO ひだまり	障害者の社会参加	叶い石やおしろい地蔵祈願札などのグッズ制作を担当した。
玉作湯神社、清厳寺など	地域資源の観光活用	地域に眠る観光素材を「まちあるき観光」の目的地として生まれ変わらせる。
島根県、松江市、えんむすび観光協会	行政連携	基本的には、地域の自立を見守って、必要に応じた行政支援を行った。

■取組の予算

○取組全体に要した費用

- ・初期投資として、約 10,000 万円

○補助金の活用

- ・「ふるさと雇用再生特別基金事業（厚労省／平成 21～平成 23）」を活用した。
- ・平成 21～23 年で約 22,000 万円

■取組におけるキーパーソンとその役割

○産・官・民の役割分担と協力体制が出来た玉造温泉の組織／見取り図



■関係主体の連携における課題と解決方法

それぞれの主体がそれぞれで活動してきた「重複のムダ」があった

⇒観光協会を司令塔に、産・官・民の役割分担と協力体制を構築した

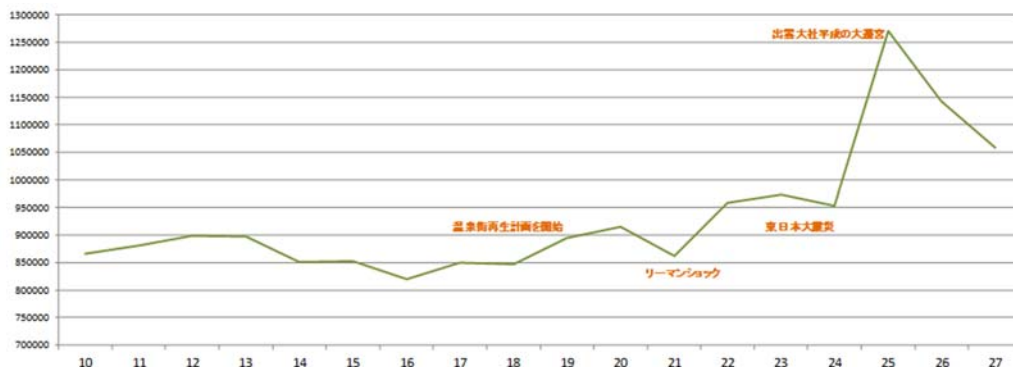
(以下、再掲)

- ・このままでは生き残れないという危機を感じ、覚悟を決めた既存の組織改革を断行した。
- ・司令塔はこれから観光協会が担っていくために、まずは事務局体制を一新し、役場から周藤實氏をキーマンとして登用。事務局は毎月役員会を行い、重複していた事業、イベント、予算のムダを精査した。
- ・観光協会が司令塔となることにより、それぞれの組織が役割に応じて事業と予算を集中させた。その結果、重複していたイベントやPRが整理され、各組織に自然と振り分けがなされ、それぞれの組織が効果的に事業を行えるようになった。
- ・併せて、各組織がそれぞれに収益事業を活発に行い、自主財源が増加した。特に観光協会は、事業収益が20,000千円を超え、全国的にも珍しい「稼ぎを生む観光協会組織」となっている。
- ・この取組が現在、各地で設立されている日本版DMOの理想モデルとして評価された。

■取組の効果

○入込客数の変化

- ・減少傾向にあった入込客数は、温泉街再生計画を開始した平成19年ごろから増加しはじめ、リーマンショックや東日本大震災時には減少したものの、平成25年の出雲大社の平成大遷宮には、約130万人となった。



- ・団体旅行から個人旅行へとシフトし、女性グループが増加した。

	平成13 (団体旅行時代)	平成18 (変革開始期)	平成27 (個人旅行時代)
温泉街の入込客数	89万人	85万人	105万人
旅館宿泊者数	65万人	53万人	55万人
旅館部屋稼働率	34% (5人/部屋)	43% (3.8人/部屋)	73% (2.3人/部屋)

○受け入れ側の意識の変化

「これだけ観光客が来てくれてうれしい。誇りに思う」と皆が話すまちとなった

- ・10年前は玉造温泉への愛着は誰もが薄かったが、温泉街を若い女性観光客が歩くようになり、活気が戻り始めると、住民やスタッフの意識が変わった。
- ・温泉街の店のスタッフが、駐車場から温泉街までの通勤ルートを歩く際、ごみを拾うようになったなど、意識の変容が起こり、これは旅館スタッフの定例の清掃、地元シルバーによる有償ボランティアの清掃活動へとつながった。



温泉街のお店の皆さん、毎日の通勤時にごみを拾って歩いている。「玉造温泉のお客様はすべて自分たちのお客様」と考えている。



足湯清掃は地元の竹下さん。週2回、4カ所を清掃する。ボランティアでやっ



温泉街の玉湯川は年間5回。除草する。地元のシルバーが

掃除だけでなく、補修もボランティアでやっ



ホテルが飛び交う頃は地元のボランティアと旅館スタッフ、旅館スタッフが丸となって「ホテルバス」を運行する。合言葉は「どこの旅館に泊まられも玉造温泉全体のお客様」。



「踊りで観光客をおもてなししよう!」と始まった湯の郷たまゆ踊ろう会。

毎週金曜の夜にボランティアで踊りを披露。夏祭りでも活躍する。

○地域経済への波及効果

- ・温泉街における店舗数が18店から38店へと増加し、これに伴い、60人以上の雇用が創出された。

■取組継続にあたっての課題、成功のポイント

- ・ポイントは、「稼ぐ」ということを考えて事業を展開していくことに尽きる。

■取組実施にあたって国や自治体に期待される役割

①「ふるさと雇用再生特別基金事業」の効果検証

⇒姫ラボ（まちデコ事業）以外にも残っている事業があるのかどうか

②成果のあった事業について国からの発信

(6) 阿寒湖温泉における地域経済に関する取組

■「阿寒湖温泉」について

- ・阿寒国立公園内に存する温泉街として、阿寒湖と森林の織りなす景観と、アイヌ文化に触れることができる温泉街である。

■温泉地を取り巻く社会状況

- ・国内観光客の減、団体旅行客の減に対する対応として、海外富裕層訪日客に対する対応が急務となっている。

■取組の概要

(6) 取組を計画するに至った背景・経緯

- ・入湯税の引き上げは旧阿寒町時代に検討するも、地元全体の同意が得られず実現に至らなかった。その後、観光客入込数は、平成 15 年度～25 年度の間に約 40%減少、それに伴い入湯税収額は約 17%減少となっていた。
- ・そのような状況の中、観光振興をさらに推進するための財源として入湯税の嵩上げ議論が再論となり、平成 25 年 6 月に独自財源研究会が設立、同研究会より平成 25 年 11 月に市に要望書の提出があり、それを受け市が庁内における検討を開始、市税条例の改正により、平成 27 年度より入湯税を 1 人 1 泊あたり 150 円から 250 円に引き上げとした。

(7) 取組の狙い

- ・入湯税引き上げ分（100 円）を基金（釧路市観光振興基金）に積み立て、釧路市観光振興臨時基金条例で定める区域で実施する観光振興事業について、市から補助金として支出することを目的としている。

(8) 主な取組とその特徴

- ・入湯税の引上げ分のみを観光振興の事業にあてるための基金条例の制定、地元と市が用途について協議し対象事業を決定している

■取組を計画・実施するにあたっての課題及びその解決方法

- ・鉱泉浴場を有するビジネスホテル等では、入湯税非課税のホテル等と比べ、利用客負担 250 円増となるため、価格競争面で不利となり経営等を圧迫する恐れがある。
→奢侈性の低い宿泊施設における入湯行為に対しては、現行税率と同額の 150 円とする軽減措置の適用を行っている。
- ・その他課題に関しては、「関係主体の連携における課題と解決方法」参照。

■取組の関係主体と役割分担

関係主体	役割	その役割を担った経緯
阿寒観光協会	地元関係団体の総括	地域観光関係の中核団体
独自財源研究会	宿泊者アンケートの実施、用途の明確化等	阿寒観光協会と J T B F の共同研究事業として設置
市	市税条例改正、基金制度設計	行政団体

■取組の予算

制度設計に関する取組であるため、費用発生はない

■取組における事業計画

- 平成 14 年 5 月：旧阿寒町にて検討会実施、町において入湯税の嵩上げを目指すも、地元全体の合意が得られず実現不可
- 平成 25 年 1 月：NPO 法人阿寒観光協会まちづくり推進機構より、釧路市に対し入湯税の嵩上げについて要望
- 平成 25 年 6 月：独自財源研究会の立ち上げ
- 平成 25 年 9 月：第 2 回独自財源研究会（阿寒湖温泉地区宿泊者へのアンケートの中間報告、宿泊客の 7 割の方が「協力したい」）
- 平成 25 年 11 月：第 3 回独自財源研究会（入湯税率の嵩上げ要望書案の決定）
- 平成 25 年 11 月：市への要望書の提出
- 平成 25 年 12 月～
- 平成 26 年 9 月：市関係部門による検討、制度設計
- 平成 26 年 12 月：釧路市税条例の改正案提案
- 平成 27 年 4 月：改正釧路市税条例の施行

■取組におけるキーパーソンとその役割

段階	キーパーソン	役割
取組の立ち上げ	釧路公立大学小磯教授（当時）	検討会アドバイザー
取組の推進	阿寒観光協会、独自財源研究会、市	制度設計
取組の継続運営	阿寒観光協会、市	運営主体と運営管理

■関係主体の連携における課題と解決方法

- 入湯税の用途についての課題について、地元からの要望のあった事業と、本来の入湯税の目的との整合性の確保
- 地元関係団体に用途とすべき事業の再生差を行っていただいた結果、入湯税の目的にある「観光の振興」に特化

■取組の効果

○利用者数の変化（阿寒湖温泉全体の入込客数）

指標	取組前（平成 25 年度）	取組後（効果）（平成 28 年度）
入込客数（日帰り）	438,863 人	473,266 人
入込客数（宿泊）	528,286 人	570,719 人

○受け入れ側の意識の変化

- アイヌコタンにおける景観形成による魅力向上のための店舗外装改装も着実に進んでおり、事業者側での入湯税引き上げ効果に対する理解も進んでいる。

○地域経済への波及効果

・補助金への活用

交付主体	事業名	補助対象	補助額 (円)
阿寒観 光協会	フォレストガーデン整備事業	・事業調査 ・基本設計等	8,608,312
	まちなか活性化事業	・外国人旅行者対応 (外国語表記案内板設置等) ・景観改善支援 (店舗改修等)	1,667,780
	マリモ家族コイン	・マリモ家族コイン政策 ・散策マップの作成	449,280
	無料循環バス「まりむ号」運行補助	・バス割賦代 ・運行業務委託費 ・燃料代等	16,386,258
	事務管理費	・事務経費	799,039
合計			27,910,669

- ・阿寒湖温泉地区内で運行されている無料循環バスまりむ号の観光客利用も増加しており、宿泊施設より温泉街に出る機会の創出に役立っており、温泉地区商店街での購入即促進につながっている。

○その他評価

- ・温泉地区の景観整備・環境整備による、来訪者サービスの向上

○利用者の評価

- ・入湯税の引上げについての理解は進んでおり、定着している。

■取組継続にあたっての課題、成功のポイント

- ・税収見込みに見合った使途事業の精査
- ・入湯税以外の事業財源の確保

■取組実施にあたって国や自治体に期待される役割

- ・税の投入に関する使途事業の精査

■取組の今後の計画・目標

- ・平成36年までの時限制度である税率引上げ分の税収見込みは48,000千円/年

5 温泉療養等における調査・研究の事例（概要）

提言における「新・湯治の効果の把握と普及、全国展開」に関し、国内で近年実施されている温泉療養に関する調査・研究の事例について、その概要を記載する。

1. <温泉入浴による心身への影響>

調査・研究名	竹田温泉群への入浴作用について
研究者	後藤 康彰 ¹⁾ 、栗原 茂夫 ¹⁾ 、野々村 雅之 ¹⁾ 、伊藤 恭 ²⁾ 、 早坂 信哉 ^{1, 3)} 1) 一般財団法人日本健康開発財団 温泉医科学研究所 2) 伊藤医院 3) 東京都市大学
研究概要	<p>【目的】 本研究では、竹田温泉群（大分県竹田市）への入浴が短期的に心身に与える影響を検討することを目的とした。</p> <p>【方法】 2017年1月に、竹田温泉群の3つの温泉公衆浴場と水道水の沸かし湯浴場で、男性（平均年齢37.3歳）に41℃10分間の入浴を実施。入浴前後に加速度脈波、舌下温、血圧、心身の状態評価を実施。</p> <p>【成績】 舌下温はすべての条件で増加。長湯温泉は1.3℃、久住温泉は1.1℃、竹田温泉は1.3℃、水道水の沸かし湯は0.6℃の上昇であった。拡張期血圧はすべての条件で有意な低下が認められた。加速度脈波では、長湯温泉で拍出強度が有意に増大し（$p<0.05$）、久住温泉で微分脈波指数（$p<0.05$）が有意に増大した。主観評価では、3つの温泉浴ではいずれも、あたたまり、血行、手足の冷え、疲労回復、リラックス感、リフレッシュ感が有意に改善したが、沸かし湯では手足の冷え、リラックス感のみが改善した。</p> <p>【考察】 同じ条件の入浴であっても、温泉では舌下温の上昇が大きかったことは温泉条件のほうが水道水の沸かし湯に比べ温熱効果が大きいことが示唆される。主観評価でのあたたまり、血行の改善もこれを支持するものである。</p>

2. <温泉を活かした湯中運動などの健康づくり>

調査・研究名	温泉を活用した健康づくり実施検証教室の評価（平成 28 年度 菊池市温泉活用事業）																																																																																																	
研究者	牧野 直樹 ¹⁾ 、三友 紀男 ²⁾ 、中田 薫 ³⁾ 、合田 純人 ²⁾ 1) 九州大学名誉教授 2) NPO 法人健康と温泉フォーラム 3) 中国医学研究所																																																																																																	
研究概要	<p>【目的】 菊池温泉（熊本県菊池市）において、温泉を活用した運動・講義及び食事等の指導による健康教室を企画し今後の健康づくり事業に展開していくための先駆的事業（菊池温泉健康づくり研究）として実施した。</p> <p>【方法】 対象は 40～74 歳で 3 ヶ月の運動・受講が可能な 30 名（男性 5 名、女性 25 名）、全体の 60% が 60 歳代であり、全員に湯中運動プログラムを実施。研究の前後で受講者に血液及び生化学検査を実施し、受講前後で比較検討を行った。なお、腰痛、膝痛を訴えている人はその有効性についても併せて検討した。</p> <div data-bbox="486 1048 906 1373" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: right;">温泉での運動の様子</p> <p>【成績】 血圧、中性脂肪、空腹時血糖値の低下を認めた。また関節痛、血管硬さ（CAVI）肝機能にも改善効果を認めた。一方、BMI、糖代謝、血液一般検査において変化は見られなかった。受講開始時と終了時に問診を行い膝の痛み、生活習慣の行動変容には改善の効果を訴える回答が多かった。</p> <table border="1" data-bbox="502 1724 901 1960"> <thead> <tr> <th colspan="7">血液検査判定 全合計</th> </tr> <tr> <th></th> <th>改善+3</th> <th>改善+2</th> <th>改善+1</th> <th>維持</th> <th>悪化-1</th> <th>悪化-2</th> <th>悪化-3</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>32</td> <td>-8</td> <td>-3</td> <td>-1</td> <td>44</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td></td> <td></td> <td>3</td> <td>30</td> <td>-4</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>37</td> </tr> <tr> <td>C1</td> <td></td> <td>3</td> <td>7</td> <td>22</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>32</td> </tr> <tr> <td>C2</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>C3</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>E</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>10</td> <td>89</td> <td>12</td> <td>3</td> <td>1</td> <td>120</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: right;">（左記判定図について） 血液判定の結果、肝機能判定・脂質判定・糖代謝判定・腎機能判定について、当初検査結果を A～F に判定。湯中運動後の改善や悪化の評価を実施。</p>	血液検査判定 全合計								改善+3	改善+2	改善+1	維持	悪化-1	悪化-2	悪化-3	合計	A				32	-8	-3	-1	44	B			3	30	-4	0	0	37	C1		3	7	22	0	0	0	32	C2	0	0	0	0	0	0	0	0	C3	0	0	0	0	0	0	0	0	D	1	0	0	0	0	0	0	1	E	0	0	0	0	0	0	0	0	F	1	0	0	0	0	0	0	6	合計	2	3	10	89	12	3	1	120
血液検査判定 全合計																																																																																																		
	改善+3	改善+2	改善+1	維持	悪化-1	悪化-2	悪化-3	合計																																																																																										
A				32	-8	-3	-1	44																																																																																										
B			3	30	-4	0	0	37																																																																																										
C1		3	7	22	0	0	0	32																																																																																										
C2	0	0	0	0	0	0	0	0																																																																																										
C3	0	0	0	0	0	0	0	0																																																																																										
D	1	0	0	0	0	0	0	1																																																																																										
E	0	0	0	0	0	0	0	0																																																																																										
F	1	0	0	0	0	0	0	6																																																																																										
合計	2	3	10	89	12	3	1	120																																																																																										

	<p>【考察】</p> <p>本研究では温泉を活用した湯中運動教室に対する魅力と効果を最大限に引き出すことができた。一方、自宅での継続的な行動変容や本人を取り巻く環境への効果には本教室が3ヶ月という短期間のため十分な結果が期待できなかった。今後、継続してできる健康運動プログラムを開発し、市民の健康増進を図りたい。</p>
--	--

3. <生活習慣としての温泉入浴>

調査・研究名	温泉の健康的活用～熱海市市民特定健診結果から～（熱海市事業）																											
研究者	早坂 信哉 一般財団法人日本健康開発財団 温泉医科学研究所、東京都市大																											
研究概要	<p>【目的】 温泉を活用した医学的研究は過去より実施されているが、習慣的な温泉入浴に伴う長期的な人体への影響については、あまり検討されてこなかった。これは温泉入浴が観光としての位置づけが強くなったこと等が考えられる。今回は、熱海市及び熱海市医師会と協力して熱海市民を対象として生活習慣のなかの温泉入浴と健康状態について医学的に解析した。</p> <p><高血圧との関係></p> <p>【方法】 熱海市民 3233 人（男性 1190 人、女性 2043 人）に対して、温泉が家庭に供給されている群とそれ以外の群に分け、調査を実施した。</p> <p>【成績】 対象とした 3233 人のうち、温泉供給群が 654 人であり、男女比、年齢、BMI、睡眠は非温泉供給群と有意な差は無かった。服薬状況については、降圧剤を服用している者が温泉供給群では 31%、非温泉供給群では 37%であり、温泉群で服用者の割合が少なく統計学的に有意な差があった。また、通常高齢になると降圧剤を飲む割合が増えていくが、年齢による影響を排除して分析した結果でも、温泉供給群の方が降圧剤服用の割合が少ないと言え、温泉が自宅に供給されている市民は、そうでない市民と比較し、高血圧症が少ない可能性が示された。</p> <p>【考察】 これまでの実験的研究から温泉入浴に伴い短期的な降圧</p> <table border="1" data-bbox="734 1086 1284 1388"> <thead> <tr> <th></th> <th>温泉群</th> <th>非温泉群</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>人数(計3233人)</td> <td>654人 (20%)</td> <td>2579人 (80%)</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">性別</td> <td>男</td> <td>256人 (20%)</td> </tr> <tr> <td>女</td> <td>410人 (21%)</td> </tr> <tr> <td>年齢(歳)</td> <td>66.7* ±6.9</td> <td>65.1* ±6.0</td> </tr> <tr> <td>BMI</td> <td>22.7 ±3.3</td> <td>23.0 ±3.5</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">内服</td> <td>降圧剤あり*</td> <td>201人 (31%)</td> </tr> <tr> <td>降圧剤あり</td> <td>46人 (7%)</td> </tr> <tr> <td>降圧剤あり</td> <td>168人 (26%)</td> </tr> <tr> <td>睡眠で休養がとれる</td> <td>505人 (78%)</td> <td>1975人 (77%)</td> </tr> </tbody> </table> <p><small>*：統計学的に有意な差あり</small></p> <p>熱海で自宅に温泉が配湯されている者とそれ以外の者の比較</p>		温泉群	非温泉群	人数(計3233人)	654人 (20%)	2579人 (80%)	性別	男	256人 (20%)	女	410人 (21%)	年齢(歳)	66.7* ±6.9	65.1* ±6.0	BMI	22.7 ±3.3	23.0 ±3.5	内服	降圧剤あり*	201人 (31%)	降圧剤あり	46人 (7%)	降圧剤あり	168人 (26%)	睡眠で休養がとれる	505人 (78%)	1975人 (77%)
	温泉群	非温泉群																										
人数(計3233人)	654人 (20%)	2579人 (80%)																										
性別	男	256人 (20%)																										
	女	410人 (21%)																										
年齢(歳)	66.7* ±6.9	65.1* ±6.0																										
BMI	22.7 ±3.3	23.0 ±3.5																										
内服	降圧剤あり*	201人 (31%)																										
	降圧剤あり	46人 (7%)																										
	降圧剤あり	168人 (26%)																										
睡眠で休養がとれる	505人 (78%)	1975人 (77%)																										

	<p>効果が確認されているが、今回の研究が特定健診受診者のみであった偏在性を考慮する必要があるとしても、温泉を習慣的に利用することが高血圧症を防ぎ健康維持につながる可能性がある。</p> <p>※本事業では、血中コレステロールとの関係についても調査・研究を実施している。詳細は、熱海温泉誌（熱海市、2017年）を参照されたい。</p>
--	---

調査・研究名	別府市高齢者 2 万人を対象とした温泉利用と既往症に関するアンケート調査の解析
研究者	前田 豊樹、堀内 孝彦 九州大学病院別府病院
研究概要	<p>【背景】 温泉利用による疾患の予防について、九州大学病院別府病院、別府市役所、別府市医師会と共同で調査を行った。</p> <p>【方法】 日常の温泉利用状況と一般的な 14 疾患の既往歴についてのアンケートを 65 歳以上の別府市民 2 万人にアンケートを実施した。その結果、有効回答が 9252 通（男性 4081 名、女性 5171 名）であった。疾患毎の特性の性差を考慮して男女別に検討した。</p> <p>【結果】 温泉入浴が月 1 回未満の群とそれ以外の群で比較すると男性入浴群では、高血圧、高脂血症、うつ病が少なく、女性では、高血圧、うつ病が少ない傾向にあった。さらにこれらの比較において、年齢、入浴頻度、入浴機関、浸漬時間、入浴時間帯を補正した場合、男性温泉入浴群では、虚血性心疾患、不整脈、高脂血症、うつ病、慢性肝炎、アレルギー性疾患が少ない傾向にあり、女性では、高血圧、糖尿病、腎臓病が少ない傾向にあった。</p> <p>【結論・考察】 月 1 度以上の温泉入浴が、生活習慣病の一部を含むいくつかの疾患について予防効果がある可能性がある。入浴条件補正に伴う既往率の変化は、温泉の入浴方法により各疾患に対する予防効果に違いを示しているのかもしれない。</p>